
DOG DAYS ~誤召喚されし者~

TR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

IJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DOG DAYS～誤召喚されし者～

【著者名】

NIGHT

【作者名】

TR

【あらすじ】

その世界……フローヤルドは普通の世界とは異なっていた。

それはそこに住む人たちも然り、戦と言う文化も然り。

そこに勇者として召喚された少年、シンク。

しかし、彼のほかにもう一人誤つて召喚された者がいた。

これはそんな不運な少年の物語です。

*不定期更新ですが、よろしくお願いします。

またヒロインについての希望や、アドバイス等が「ございましたら何

なつとお知りせぐだわい*

前書き（必ずお読みください）

初めての方は、初めまして。

それ以外の方は『無沙汰しております。

今回は数多くある作品の中から、本作のような駄文を選んでいただきありがとうございます。

読んで頂くにあたって、お願こと書いた箇所の注意点がございますので、お知らせしたいと思います。

- ・本作品は『魔法少女まどか マギカ～革命を促す者～』で”渉がもし見滝原氏ではなくフローニャルドに向かつたら”とこのエントリを作成しております。

そのため本作では原作とは場違いな技や設定が色々出てくる可能性がございます。

- ・物語の進行上、『都合主義と思われる設定など』が出てくる可能性がございます。

- ・本作はかなりひどいチート＆厨一現象が発生する可能性があります。

以上の点をご了承いただけると幸いです。

もしそういったものが苦手な場合は読まれないことをお勧めします。

それでは、本作をお楽しみください。

プロローグ（前書き）

いよいよ本篇が始まります。
どうぞ、よろしくお願いします。

プロローグ

それはとある世界でのこと。

そこはまるで重役会議のような重苦しい雰囲気の漂つ一室だった。

「やはりガレット獅子団の兵士たちは、ミオン階を攻めに来るようですね」

「ガレットの連中、本氣でこの城まで侵攻してくる気でしょうか？」

男性の言葉に、緑色の髪の少女が疑問を投げかけた。

「ガレット獅子団のレオンミシェリ閣下は勇猛な方ではあったが、かような無茶をされるような方じゃったかのう？」

「理由はどうであれ、この数戦はひたすら負け戦じゃ」

「せめてダルキアン卿やテンコ様がいてくれたらのう」

老人たちが次々に意見を出し合つ。

「騎士ブリオッシュやコキカゼにも使命がありますれば」

「ともあれ、この戦をしぶじれば最悪の場合このフィリアンノ城まで」

男性の言葉に老人が不安げに咳く。

「それは

「させません！」

男性の言葉を遮り、緑色の髪をした少女は叫びながら立ち上がった。

「姫様の為にも、ビスコッティの民の為にも、この戦は我々が！」
「エクレ、今はその姫様の御前でありますよ」

栗色の髪をした少女がエクレと呼ばれた少女を咎めた。

「あ……失礼しました」

「ありがとうございます、みんな」

そんな中、上座の席についていた少女が沈黙を破った。

「我がビスコッティの苦しい戦況、よく分かりました。今回は本当に負けることはできない戦です。ですから、最後の切り札を使おうと思います」

ピンク色の髪の少女の言葉に、その場にいた者達がざわめく。

「ビスコッティ共和国代表、ミルフィオーレ・フィリアンノ・ビスコッティの名において、我が国に勇者を召喚します！」

それは既にでも見られる状況だった。

唯一異なると言えば、そこにはいる者達の頭には”犬耳”が生えていたことであった。

天界、そこは周りが白面の世界。

言つなれば何もない世界だ。

そんな中、俺は何をするでもなくのんびりと過ごしていた。

「ここにいたのか」

「何の様だ？ ノヴァ」

俺は声をかけてきた創造の神、ノヴァを睨みつけながら用件を尋ねる。

「そう睨まない。仕事の話じゃ

「……」

俺はノヴァの口から出た”仕事”と言つ単語に表情をこわばらせる。

俺の仕事、それは管轄の世界を安定させると言つものだ。

それは、世界の意志と言つ存在であるからなのだ。

「前にも話したと思うが、ある世界で異常な時間経過の減少が発生しておる

「ええ存じ上げております。地名は見滝原でしたよね。何か進展でもあつたのですか？」

ノヴァの言葉に、俺は少し前にノヴァから伝えた仕事の内容を思い出しながら答えた。

「やうじや。実は出発の日には世界移動用の次元空間の状態が悪いらしいのじや。よつて比較的に安定している今向かつて貰いたいの

「じゃ

「随分と急ですね」

俺はノヴァの言葉に、皮肉交じりに答えた。

世界移動用の次元空間はどの空間よりも安定しており外部からの干渉は一切受け付けない。

但し、それも周期的に不安定となってしまうことがあるのだ。

それが出発予定期と重なつてしまつたらしき。

「わかりました。それではすぐに行くとしましょう」

「本当にすまない。お主の要望通りの武装だが、念の為に現地に到着したらすぐに確認するのよつ」

ノヴァの言葉を聞き流しながら、俺は支度を済ませる。

「あ、それと言つ忘れたがお主の名前は、小野 涉じや。健闘を祈る」

「了解です。では世界の意志、小野涉任務に向かいます」

ノヴァから貰つた名を手に、俺は次元空間を開くとそこには身を投じた。

世界移動用の次元空間は白とピンク色が合わせたよつな空間だつた。

俺はそこを目的地に向けて只々降りて行く。

「目的地までの距離は502キロ…………かなり離れた世界の様だな」

俺はモニターに出た残りの距離の長さに絶句した。
まあ、これでも12時間あればたどり着ける距離だが。

「まあ、長旅になりそうだし。気を樂にするか

俺はそう呟くと、体中の力を抜いて、ただ前に進むことを考えた。

出発から5時間半が経過した。

俺はモニターをチェックする。

「残りの距離は270キロ…………まだ半分にも行っていない。 次元
空間の状態も良好」

「ここまでノンストップで来ているので、さすがに疲れも出る。

「世界の意志と言つのも因縁な仕事だ」

俺はそう呟きながら移動を続ける。

もちひん不満があるわけではない。

俺のような愚か者を一度と作り出せないようになるべく、俺は今まで頑張ってきたつもりだ。
だが、時々考えてしまう。

俺も普通の人のように生活をしてみたい。

世界に縛られずに暮らしたいと言つ願望が。

まあ、考えたらすぐに消すようにしていい。
世界の意志にあるまじき思想だからだ。

しかし、その時は近づきつつあった。

それは6時間が経過した時だった。

「な、何だ！？」

突如として次元空間内にノイズが走ったかと思うと、流れがおかしくなった。

『涉！ 聞こえるか！？ 涉！…』

「おい、ノヴァ！ これはどういう事だ！…」

突然頭に聞こえてきたノヴァの声に、俺は叫んで問いただした。

『強い空間干渉じゃ！ ものすごいエネルギーの為にそっちの空間にまで影響が生じ始めているのじゃ！ 早く戻るのじゃ…。そもそも一度と帰れなくなるぞ…！』

「なッ！？」

ノヴァの言葉に、思わず固まつた。

この次元空間は、どのよつた干渉をも受け付けないはずだ。
それをも覆らせると言つとは、かなりの最上級レベルの術式のようだ。

『わしのミスじや。ともかく急いで脱 ザ ザ ザ ザ 』
「お、おいーー！」

ノヴァの声にノイズが走り出し、とうとう完全に聞こえなくなつた。
(これって完全にやばいよな)

俺は本能で察すると、急いで方向を180度変えて進む。
帰る時はのぼりになるため靈力を使つて加速しなければいけないのだ。

俺は最高速度で空間を突っ走る。
突然けたたましく鳴り響くサイレン音とともに、モニターが表示された。

『異常発生。後方29キロにて不正ゲート出現、拡大中』
「何だと！？」

俺は最高速度で進みながら下を見る。
そこにはピンク色の陣が出来ていた。
あれは、魔法陣か！？
しかも拡大中ということは、じつに迫つて来ていると言つ事かよ！？
不正ゲートと言つのは次元空間内に外部から強引に生成された出入り口の事を言つ。

『警告！ 不正ゲート後方15キロまで接近！』

サイレン音はアラートへと変化する。

下を見ると確かにその魔法陣は大きくなつてきていた。

(とはいってもこれが最高速度だつてのー。)

「天界まで残り100キロ。逃げ切れるか!-?」

それは賭けだつた。

展開にたどり着ければあの魔方陣の干渉は受けられないはずだ。
しかし、先ほどまで断続的に鳴り響いていたアラート音が連続して
鳴り響き始めた。

『警告! 不正ゲート後方5キロまで接近!』

モニターに出てきた警告に俺は心の中で毒づきながら駆け抜ける。
そして天界まであと25キロと言つといふまで来た時だつた。

『警告! 不正ゲート後方1キロまで接近! 至急緊急離脱をして
ください』
「つちい!」

俺は状況が悪化したことに舌打ちをした。

見ればもう目前にまで魔法陣が迫つて来ていた。

ちなみに、緊急離脱と言つのは不正ゲートに飲み込まれる前に、ど
こかの世界に出ると言つものだ。

やつてもいいのだが、出た世界が安全な世界であると言つ保証はな
い。

最悪の場合には命まで取られかねない。

なので、俺は緊急離脱に踏み切れなかつた。

「天界まであと5キロ。あと少しで

」

俺の希望の心は、即座に消された。

そう、目の前に迫ったピンク色の魔法陣によつて。

「うわあああああーー！」

そして俺はその魔法陣に飲み込まれた。

辺りは真っ黒でピンク色の稻妻の様なものが走っていた。

そこで俺の意識は途切れていった。

今思えば、これが俺にとって運命を変えるきっかけとなる事件の序章でもあった。

第1話 たどり着いた世界は……（前書き）

大変お待たせしました。
第1話になります

第1話 たどり着いた世界は……

「ん……」

俺はつるさく鳴り響く花火の音で目が覚めた。

「こつち……ここはどこだよ」

俺は毒すきながら辺りを見回す。
そこは何の変哲もない森だった。

(確か不正ゲートに飲み込まれたんだよな？ 俺)

状況を把握した俺は即座に行動に移した。

「コネクト」

俺はこの世界にアクセスすることにした。

俺が知りたいのは、ここがどこなのかという情報だ。

そして世界の因果情報や世界の根源を見れば、少しほ分かるのだ。
しかし……

「弾かれた！？」

俺は驚きのあまりに思わず大きな声で叫んでしまった。
何と俺のアクセスを世界が拒否したのだ。

「管轄外の世界か。面倒な」

俺は状況の悪さに舌打ちをする。

俺の管轄する世界ではない場合、その世界をまとめる神にアクセス権を譲渡されなければならない。

もちろんだが、ここに具現化している場合はそれがどの人物かを見分けるのは難しい。

まあ、理由の一つに力が弱いと言うものもあるが。

「それじゃ、まずは誰かがいる場所に行くとするか…………ん？　なんだあれば」

歩き出すとした時、俺は地面に落ちている一本の短剣を見つけた。
「どうやら僕は運がいいらしい。ここに来て新たな武器が手に入る
とは」

俺はその一本の短剣を取りながら呟いた。
自分の持つ武装に不安がないと言つたらうそになる。
少しでも武器は多い方がいい。

「こしてもこれはちょっとな…………」

俺は短剣を観察する。

それはリーチが異様に短く、しかも刃には鱗が入っていた。
おそらく一、三回打ち合えば折れてしまうような感じもする。

「まあ、いいか　　ツ！？」

俺は突如伝わってきた黒い波動に短剣を放り捨てた。

「…………最終審判、レクリエム！――」

そして俺は超必殺技を使い、一本の短剣を破壊した。

「何ッ！？」

しかし、一本の短剣はまるで何事もなかつたかのようにここにあったのだ。

俺はこの時自分の運命と浅はかさを呪った。

「こいつは呪剣か」

呪剣

それはその名の通り呪われた剣の事を言つ。
そのほとんどが持ち主に災いをもたらすもので、決して破壊も出来なければ手放すこともできないのだ。

「仕方がない。これを持つて長い時間をかけて浄化するしかないか」

俺に出来る事はそれだけだった。

俺はそれを格納空間にしまうと歩き出そうとする。

「ツー？」

その時、俺は何かを察知して後方に下がつた。

その瞬間、俺の目の前を何かが通り過ぎたかと思つた瞬間、まるでやわらかいものを切るように樹木が切り倒された。

「斧ー？ 敵か！」

俺はすぐに辺りに気を配った。

しかしその人物はすぐに姿を現した。

茶髪のおじさんだった。

「ほう、ここの俺の奇襲を躊躇すとは、只者ではないようだな」
「突然攻撃してくるとは……〈品知らすもいたものだ〉

俺はそう言いながら几の武器である斧を取りに行くおじさんを見る。
そして気づいた。

「…………は？」
「どうした小僧？」

俺は田を疑つた。

田の前にいるおじさんの頭にまなんと猫耳がついていたのだ！
しかもしつぽまでーー！

(なうせじ、ここせむひぬひまほ縣か)

俺も色々な世界を見てこるとこつ自負がある。
なのですぐに入納得がいった。

「何でもない、さてひ弱な物にこれを使うのも申し訳ないが、これ
しか武装はないのだ。許しておくれ」

「言ことよるな小僧。くるがいい！」

俺は両手に神剣、叫宗正宗を展開する。

「おじやーー」
「つふーー」
「つづーー」

おじさんが放つたのは、鉄球だった。
しかしそれを俺は難なく躱す。

「はあーーー！」

「甘いーーー！」

次はこっちに向かつて突進しながら斧を振り下ろそうとする。
俺はそれを躱しながら正宗の柄で軽く小突ぐ。

「ぐうーーー？」

「不届き者よ、我が前にひれ伏したまえ！ 拘束の壇上歌」

そして俺は痛みで動きを止めた一瞬のすきを突き、おじさんを白銀の光で縛りつけた。

「な、何だこれはーーー？」

「貴方との戦いは非常に心が躍りますが、今はその時間がない故これにお開きとさせていただきます。では、失礼」

俺はおじさんに向かって言い残すと、素早く走りながら森を立ち去った。

第2話 勇者との遭遇（前書き）

今回、いよいよシンクたちが登場します

第2話 勇者との遭遇

さて、俺の今の状況は。

「だ、誰だ ウギヤ！？」

「邪魔だ！！」

目の前にいる邪魔な人たちをひたすらに斬つて斬つて切り裂いています。

なんでそうなるのか、それはほんの数分前にさかのぼる。

「全く一体全体何なんだ？」

俺は頭を抱えながら走っていた。

周りの様子からに戦争の様なものであることは理解できる。なのに……

「この勇者、とても強い！！」

なぜ実況がいるんだ？

と言つより、まるでスポーツのような雰囲氣がする。なのに、田の前で行われるのはどう見たつて戦争だ。

「はあー！」

「つど？ー！」

突然剣での襲撃があつた。

目の前にはあのおじさんと同じ色の服を着た傭兵のよつなものがつた。

「ふん！」

「ぐあー！？」

俺は剣劇を避けると正宗で思いつきり切りつけた。

その瞬間、目の前にいた人は煙に包まれた。

「…………は？」

煙が晴れた時に見た光景に、俺は思わず言葉を失つた。
なぜなら、そこには猫の顔をしたボールのよつな生物がいたからだ。

「お前、ビスコッティの兵士だなーーー！」

「かかれーー！」

そして今に至る。

(と言つより俺は今ビコに向かつてゐるんだよーーー！)

俺は当然もなく一直線に走つてゐる。

「速い、速すぎる……」この謎の人物は一体何者なのでしょうか！

！」

「ん？」

再び実況をしている人の声が聞こえてきた。

空中に浮かんでいる正方形の物を見ると、そこには俺が映し出されていた。

「俺かよ！」

「もしかしたらビスコツティ共和国が召喚した一人目の勇者なのか
もしませんね」

だから勇者って何ぞ？

俺はツッコみたい気持ちを抑えてただひたすらに走る。
そして目の前にいる敵を切って行く。

けがはしないから、大丈夫……だよな？

そんなこんなで走つて行くと行き止まりとなつていた。

そして下の方では短めの金髪に頭には青い鉢巻をした少年と、緑色の髪をした少女がいた。

話が聞けると思い、下に降りようとした瞬間向かいの崖に、下の二人に向けて攻撃を放とうとしている銀色の髪をした女性の姿が見えた。

「二人とも、後ろの上から攻撃が来るぞ！……」

「ツ！？」

俺は大きな声で下の二人に伝えると、緑色の髪の少女が両手にある短剣でその攻撃を防ぐが、防ぎきれずに吹き飛ばされた。

「ほんのちびつと期待してきてみたが……所詮は犬姫の手下か」

「ツー？ レオンミシリ姫！」

攻撃を放った人物に、少女はその女性の名前と思われる単語を呟いた。

「ちひち、姫ときやすく呼んでもらっては困る」

その人物は何やら変わった生き物に乗っていた。

「わが名はレオンミシリ・ガレット・デ・ロワ。ガレット獅子両国

の王にして百十段の騎士」

そう言つてへんな生き物が一歩踏み出す。

「閣下と呼ばぬか、この無礼者が！！」

「来たーー！ 来ました！ レオンミシリ閣下、戦場到着ーー！」

実況の人が何やらわめいている

「はははー、それはさておき、私は先に進ませて貰おつ」

そつ言つて銀色の女性は去つて行つた。

「よつヒー！」

俺はすぐさま一人の横に着地した。

「つーー！」

「え、あ、じめん」

そして二人を見ると少女が上で、少年がしたに横たわっている状態だつたが、少年は少女の胸を掴んでいた。

(何やつてるんだ？　この二人)

その少年は自分の手を……といつより感触を感じて少女を見て一言呟く。

「女の子？」
「ツー？」

その少年の言葉に少女は固まる。
俺も固まる。

「この…………すつとこ勇者がああ――――」
「吹つ飛べ――！」

やることは一緒だった、俺と緑色の髪をした少女は少年を吹き飛ばした。

「おつと仲間割れか！？　そしてこの勇者、意外とあほか？」「いちいち実況すな！」

今更突っ込んで遅いツツ「ツツ」をする。

「つたく、胸揉んで拳句の果てには女の子だなんて失礼極まりないだろ。どこのをどう見れば彼女が男に見えるんだ？」

「ツー？」

僕の言葉に横にいた少女が頬を赤くしていた。

まさか怒りしたか！？

「と、ところでだ。あんたは何者だ？」

「あーそれは後々、今はあの馬鹿者を連れて追いかけないと」

「そ、そうだな」

俺の提案に少女は頷くと俺達は少年の元へと走つて行くのであった。

第3話 恐怖の紋章砲（前書き）

今回は少々短いです。

それでは、第3話をどうぞ

第3話 恐怖の紋章砲

今、俺達は閣下の走つて行つた方向に走つていた。
そして何やらクレーターのようになつてゐる場所に、そこを飛び越
えている閣下の姿があつた。

「「させるかああ！…！」」

「あ、こら待て…！」

俺は駆けだす一人を止めようとしたがそれを聞かず、特攻していく。
むやみやたらに特攻をしてもいいことは一つもない。
現に閣下は変な生き物から離れて一人の武器がかち合つた所に砲撃
を放つた。

俺は急いで、一人の元に駆けよる。

「おい、大丈夫か……つて」

今度は少女が下で少年が上になつて倒れていた。
と言うより少女の服が一枚無くなつてるんだが？

「勇者、お前は何なんだ！ 戦いの邪魔をしに来たのか！？」
「いや、お前ら一人のミスだから」

言い合つてゐる一人に、俺はそうツツコんだ時だつた。
背後からエメラルド色の光が輝き始めた。

俺は慌ててその方向を見ると、そこには閣下の背後には何かのマー
クのようなものが浮かび上がつていた。
その体にはエメラルド色の輝きを纏つてゐる。

「おりやー！」

手に持つ何かを地面に振り下ろした瞬間、何かの模様があしらつたものが現れた。

「な、何だよ、あれ？」

俺がそう呴いた瞬間だつた。

「獅子王炎陣！」

閣下の言葉と同時に、地面から火柱が吹き上がりってきた。どう見ても危険な物には違ひがない。

「のわあ！？」

さうして上空からの溶岩まで飛んでくる始末だ。俺は急いで逃げた。

「紋章術って、こんなことまで！？」

「レオ姫は桁が違う！ 倒されたくなれば」

「とにかく逃げる！..」「

二人は意味不明の単語を呴いて走つて行く。

「お、おい！..」これは一体なんだ！..

俺の問いかけに答える人はいない。

「これはやばい！.. 万物よ、我を守りし

「

俺はとつさに日本の神剣を十字に掲げて防御術の詠唱をする。
だが……

「大爆破！！！」

閣下の一言によつて、周囲が赤一色になる。
やがて、けたたましい爆音が響き渡つた。
俺はそのあまりにもすごい威力に目を閉じた。

3人称Side

レオンミシェリの紋章砲、『獅子王炎陣大爆破』によつて火玉と、
衝撃波が辺りを襲う。

「爆破あ！ レオンミシェリ閣下必殺の、獅子王炎陣大爆破！！
範囲内にいる限り、立つていられるものは誰もいないと言う、超絶
威力の紋章砲。味方も巻き添えにしてしまうのが玉に傷ですが、そ
れにしても強い」

そしてそれが止むと再び大きな声で実況された。
レオンミシェリも勝利を予想した時だった。

「おつと！ その大技を受けながらも立つているものが一人います
！！」

「何ー？」

男性の声にレオンミシエリは驚きを隠せなかつた。
そして土煙が晴れ、その人物の姿が露わになる。

「先ほど突然現れた謎の勇者です！！ 謎の勇者がレオンミシエリ
閣下の紋章砲を受けて無傷で立つています！！！」

そこにいたのは、渉であつた。

S i d e o u t

第4話 激闘！ レオン＝シエリ閣下

「ふう、危なかつた」

俺は両手に十字架に構えた神剣の構えを解く。あの時、間一髪のところで防御術の詠唱を終わらせることが出来たのだ。

「なるほど、さすがは閣下と呼ばれるだけはある。かなり強い」「お主、一体何者じや？」

俺は閣下の驚きようを見ながら吉宗をしまつ。

「さあ、どうでしようかね？ ですがとりあえずは降つてくる一人のための布石を打たせていただきます……」

俺はそう告げると、卑怯とは思いつつも停止石を閣下に向けて投げる。

ちなみに形状は砂の様だが名前は石と言つたがついてくる。

「ツグーー？」

この効果はほんの2秒間、だがその2秒を俺は見逃さない。

「封陣滅殺！」

相手がせこご技を使うのであれば、俺もそつといつのを使つまで。
まさこ田こは田を、歯こは歯をだ。

「それでは、後は一人の勇者に任せましょうかね」「さう簡単」

「もう簡単に……やられるかああああああああああああああ——

1

「にしても高すぎない？」
ねえこれ高すぎない？」

上空に少女と少年の姿が。

おそらく上空に逃げていたのだろう。

「うるさいな！」少女が少佐を蹴り飛ばす

「ひでえええ！…！」

少年は落ちながらも棒状の武器を振りかざす。だが、閣下の斧とぶつかり合い、少年は吹き飛ばされる。少年が着地すると同時に少女も閣下を挟むように着地する。そして一人は同時に駆けだすと己の武器を振りかざす。それを閣下は斧と盾で受けたが粉々に砕けた。さらに一人は追撃する。

やがて一人の攻撃は閣下に命中した。

(あれ? 今のつて)

その時、俺はあることに気が付いた。

たが、それを言ひよりも早く
闇下の防具は粉々に壊れセクシーな
姿になつた。

「」のまま続けてやつてもよこがそれでは、ちと西国民へのサービスがすきてしまつたの。」

そう言つてセクシー・ポーズを決める閣下。

「レオ閣下、それでは……」

「ん……わしあのじで降参じや」

その声と同時に花火が打ちあがつた。

『まさか……まさかのレオ閣下敗北、総大将撃破ボーナス350点が加算されます。今回の勝利条件はあくまで拠点制圧ですので戦終了とはなりませんが、このポイント差は致命的、ガレット側の勝利はほぼないでしょう』

もうポイントとかの意味もあまり分からぬが、これでこっち側の勝利だと言うことは分かった。

(ついで、俺は何時こっち側の人間になつたんだ?)

そんな疑問に駆られていると閣下がこっちに向かってきた。

「お主、名は何じゃ?」

「小野……小野涉です」

俺は閣下に言われて自分の名を名乗つた。

「ワタルじゃな。わしの事はレオ閣下と呼ぶと良い」

「はい。レオ閣下」

俺はレオ閣下に言われた通りにすることにした。

「それと、ワタルとは次また機会があれば正々堂々と戦いつもりじやから、覚悟しするように」

俺にそう言い残してレオ閣下は俺から離れて行つた。

と言つより、あの卑怯なやり方の事根に持つてたんだ……

俺は苦笑いをしながら少女の方に向かう。

俺は向かう時に脱いでおいた礼装の上着を差し出した。

俺の礼装は上着が青と白の色合いで、だがその下は黒一色だ。

「な、何だこれは？」

「俺の礼装。良いから着ておけ。まあ、全員にサービスをしたいのであれば別だが」

俺はそう言ってその場を立ち去る。

少女は渋々と礼装を羽織つていた。

それからじばらくして礼装以外の服が破け、下着を残して裸になつた。

ちなみに原因は少年の武器が少女に当たつていたからだが。

「なんという幕切れだよ」

しかし」の後が災難だつた。

「！」の… 「！」の… 「！」の…！」

「うわ！？ なんで俺まで追いかけられてるんだよー…」

なぜか俺は少女に少年と共に追いかけていた。

「教えてくれなかつたからだ…！」

まさに災難だつた。

「しかし」の勇者達、強いしゅうじこがやつぱり若干アホかもしれません

「ほつとこへ！」

「一緒にするな

僕と少年はナレーターに突っ込んだ。
と書つよつ一緒にされるのは嫌だ。

「そして騎士エクレール、おいしい映像ありがとうございましたー。
『ええい、やかましいー。』

本当に勘弁してくれ。

第5話 事情説明（前書き）

かなり時間がかかりました。
第5話です

第5話 事情説明

あの後、Jの戦はジスコツティと叫う国の勝利に終わつたらしい。

「それから団長、今回華々しいデビューモードを果たしました勇者さん達にもお話を伺いたいんですけど」

「え、あー。ゆ、勇者殿については追々明かしていくといふ事で、今日はその……」

実況の人の言葉に、取材に答えていた男の人 確かロランと言つたか？ は語尾を弱める。

「今日は謎だと？ ああ分かりました。ではその分団長からたっぷりとお話を伺いましょう！」

「はあ……ナイス判断です、兄上」

「だな」

俺は少女の呟きに答えるながらある場所を見る。

「帰れない、僕はここから、帰れない」

「それにしても暗つ！」

あの金髪の少年勇者は、ここから帰れない事を知つてからずつと体育座りで落ち込んでいた。

「ところでだ、あなたは誰なんだ？」

「ああ、そう言えば自己紹介がまだだつたな。俺は小野 涉、世界を旅するしがない男だ。世界の移動中に突然こっちに飛ばされたんだ」

俺は自己紹介をしながらここに来る敬意を簡単に説明した。

「私はエクレール・マルティノッジだ。呼び方はエクレールでいい

少女……エクレールと互いに自己紹介を果たしたところで、少年勇者を連れて町へ行くことになった。

町に着くと、近くにあつたベンチに俺と少年勇者が座り、近くにあつた台座らしきものにエクレールが座った。

「まあ、そうだよなあ……」

少年勇者は”けいたい”と言うものを取り出すと、その画面に表示されている”圈外”という文字にため息を吐いていた。

「異世界だもんな……」

「まったく覚悟もないのに召喚に応じたりするからだ

少年勇者の言葉に呆れたようにエクレールはやつまづく。

「覚悟つ！？ 覚悟も何ものワシノコが！ 踊り場から降りよつとしたら、落とし穴を仕掛け！」

少年勇者は俺の横で丸まっている犬を恨めしそうに睨んでから、エクレールに涙目で訴えた。

「落とし穴？ タツマキが」

すると”タツマキ”と呼ばれた犬は丸まつた状態からその場に座り、首を振つてから世界移動中に見たのと同じような小さな物を地面に浮かび上がらせた。

俺達は興味津々にその小さな物の……紋章陣を見る。

「何々…………よつ」ソフローヤルド、おいでませビスコッティ

紋章陣に描かれた文字を読むエクレールに犬は、紋章陣を指差すよう手を紋章陣に向ける、よく見るとものすごい小さな文字で何かが書かれていた。

「注意、これは勇者召喚です。召喚されると帰れません」「え？！」

少年勇者はエクレールの言葉に驚きながら声を上げた

「拒否する場合はこの紋章を踏まないで下さこ」

「あ……あ……あ」

みるみる少年勇者が燃え尽きて真っ白になる。
良じよみに燃え尽きてるな。

「そんなん分かるかああああい……」

燃え尽きた少年勇者はまたもや涙田で立ち上がりエクレールに詰め寄つた。

「知るか！ 私に言ひつなー！」

若干理不尽な少年勇者の問い詰めに、エクレールは少々キレ氣味で答える。

だが、それも俺に言わせれば……

「これってある意味詐欺だぞ」

その一言に反きた。

と詰つよつここれは一体何語だ？

「……ふん、まあ貴様を歸す方法は学院組が調査中だ、時期に判明するぞ」

「……だといいけど」

エクレールの言葉に少年勇者は涙を必死に堪えていた。

(何だか子供っぽいな)

俺は少年勇者の様子を見て思わずそつ思つてしまつのであった。

「とりあえず……まあ……その……なんだ、ワタルは別だがアホといえど貴様らは賓客扱いだ、ここで暮らしに不自由はさせん」

エクレールは俺達に背を向けて詰つてから何やら袋を2つ取り出

し少年勇者には大きな袋を、俺には小さな袋を手渡してきた。

「まずはこれを受け取つておけ」

「これお金? いや、さすがにお金は…」

「戦場での活躍褒賞金だ。受け取りを拒否などすれば財務の担当者が責ざめる」

「とにかく何で俺までそんな大層な物をもらえるんだ?」

俺はエクレールに疑問を投げかけた。

確かに俺がやつたのは、一人に攻撃が来る」とを知らせ、レオ闇下の紋章術を防いだことぐらいだが。

「お前はレオ闇下の紋章術を防いでさらには敵の兵士たちを倒していたことの褒賞金だ」

「そう言えば、あそこまで向かう時何かを切り裂いていたような気がしたんだけど……あれが敵だったのか」

「全く、お前は……」

思い出しながら呟いていると、エクレールは俺を呆れた様子で見ていた。

「兵士達も楽しいから戦に参加している者も多いだろうが、褒賞金の支給は自分がどれだけ戦に貢献できたかが大切な目安だ。少なくとも参加費分は取り戻したいというのも本音だろうしな」

「え? ! 参加費」

エクレールの言葉に少年勇者が驚きながら声を上げた。

俺も少なからず驚いていた。

「やれやれ、これはかなり初歩的な所から教えてやらんといかんな

そういつてエクレールはやれやれと言わんばかりの様子で自分の頭に手を置いた。

その後街を散策しながらエクレールの説明が始まった。

「戦は国交手段でもあるが、同時に国や組織を挙げてのイベント興行でもある。今回はガレットと戦つたが、もつと規模の小さい……村同士や団体同士の内戦もあるな」

「村対抗の競技大会兼、お祭りみたいものか？」

「まあ、そんな言い方も……できるか」

少年勇者の例えに、エクレールが頷いた。

「戦の興行を行う際は、興行主が参加希望者から参加費用を集めて、

それを両国がそれぞれに計上する」

再びエクレールが説明を始めた。

「そして戦を行い戦勝国が約六割、敗戦国が残りの約四割を受け取る。これは大陸協定で決められた基本の割合だ。分配した費用の内、

最低でも半分は参加した兵士の褒賞金に当たられる。この割合も協定で決まっている。そして残り半分が戦興行による国益だ

本当にスポーツみたいだ。

普通の戦は協定もないし勝利した側がすべてを奪い取るというシステムだ。

まあ、不意土がある時点でシステムも減つたくれもないが。

「病院を建てたり、砲を作ったり、公務の為に働く者を養つたりなど、國を守る為に使われる」

「へえー」

エクレールの説明は終わつたみたいだ。

「あとで……えっと、本物の戦争つていうか、大陸協定つてのを守らなかつたり、人が死んじやつたりするような戦いとかは……」

「……歴史を紐解けばそういうた争いも無くはない」

少年勇者の問いかけに、エクレールが答えた。

「特に魔物との戦いなどではな

魔物つて……本当にここは何でもアリだな。

「我々が戦で負傷せずにいられるのは、戦場指定地に眠る戦災守護のフロニャ力のおかげだ。それ以外の場所なら怪我もするし死にもする」

どうやら俺がここに来たときに感じた気はフロニャ力のよつだった。

「じゃあ、守護されている場所ってどれくらい？」

「元々守護力強い場所に国や町、砦が出来ていいんだ。海道や山野は危険な場所が多いな、とくに海道は大型野生動物の危険度も高い。だが戦の為に移動する隊列に加われば逆に安全な旅ができるという利点もある」

そんな話をしていると大きなお城にたどり着いた。

どうやらここがフィリアンノ城と言う場所らしい。

そして俺は”リコ”と言う人物に会うべく中に入るのであった。

第6話 新たな出会いと今更の……（前書き）

今回はヒロイン候補にも挙がった人物が登場します。
そしてようやく名前が明らかになります。

第6話 新たな出会いと今更の……

早速だが今の状況を簡単に説明しよう

「もうし訳ないであります！…」

ビスコッティ城内の図書館の様な場所に響き渡る声、そして田の前で深々と頭を下げるオレンジ色の髪をした犬耳の少女だ。名前は『リコッタホールマー』

学術研究院の首席らしい。

とは言え、それがどのくらいすごいとかは分からぬが。

「このリコッタ・ホールマー、誠心誠意、勇者様がご帰還される方法を探していたであります……力及ばず、未だ何ともどつこもこうにも」

そう言いながら何度も何度も頭を下げる少女に、俺は何ともいたたまれない気持ちになつた。

(何だか俺達がいじめているような感じが……)

しかも周りにいる人たちも何事かとこつちを見ているし。

「いやリコ落着け。私も勇者達もそんなにすぐに見つかるとは思つてない

「えー？」

エクレールの言葉に俺の隣にいる少年勇者が驚きの声をあげた。

「まあ、俺としては戻れる戻れないなんて関係ないし」

「えう……そ、そうだよ、うん」

「本当にありますか?」

俺達の言葉にリコッタ（本人曰く呼び捨てでいいとのこと）は心配そうにやつ言いながら顔を上げ俺達を見る。

「期限について何か言つてたな、いつまでだ?」

「ええっと……春休み終了の三日前…………の前日には、家に居ないといけないから……あと一六日だ」

エクレールの問いかけに少年勇者は考え込むと期限を提示した。

「俺の場合は期限は三一四月一日でいい」

それに倣い、俺も期限を言つた。

「一六日に三一日! それなら希望が湧いてきたあります!」

少年勇者の言葉にリコッタは笑顔でそう言つた。

「うん、お願ひします。でもその前に……」

そう言いながら少年勇者は、携帯電話を取り出してリコッタに見せた。

「呪喚された穴の所に行つたら、電波通つたりしないかな?」

「…………でんぱ?」

少年勇者の言葉にリコッタは不思議そうな顔をする

もしかして電波の事を知らないとかではないよな？

俺の場合は見たことはないが、知識はあるのだが……。

「そういうえば勇者様、こちらの方は勇者様のご友人でありますか？」

「え？ 違うけど……そう言えば君は誰だっけ？」

リコッタの問いかけに、少年勇者が今更な事を聞いてきた。

「今更それを聞くか……まあいい、俺の名前は小野 渉だ。呼び方は任せる」

「シンク・イズミです。呼び方はシンクでいいよ。よろしく」

俺の自己紹介に、少年勇者……もといシンクはそう言いながら笑顔で、片手を差し出してきた。

俺はその手を取ると握手を交わす。

「涉様ですね！」

「リコッタ、様付けはやめて……・寒気がするから。それに俺は様付けされるほど大層な身分でもない」

俺はリコッタにそう告げた。

俺は様付けされるのが微妙に嫌いなのだ。

元々俺の場合はそんなに偉い人物でもないのだ。

「それでは、涉さんで」

「うん。それでよろしく」

とりあえず一通り自己紹介が終わったので、俺達はシンクが召喚された場所へと向かうのであった。

第7話 訪れた先は……（前書き）

未だにアニメで換算すると第3話です。
それでは、どうぞ

第7話 訪れた先は……

今俺達は高台へと来ていた。

どいつやらじこじがシンクが召喚された、召喚台になるらじい。

「くつ…………ぬううひひつ…… やつぱり通れないっ！！！」

そんな中、シンクはエクレールに紋章を出してもらつて通ろうとしているが、結局無理だったようだ。

ちなみにリコッタは大きな動物 セルクルと言つたか？ に積んでいる機械を操作していた。

「だから言つているだろうが」

紋章から手を抜いたシンクに、エクレールが呆れながら言つた。

「人生なんでもチャレンジ！ ネバー、ギブアップ！！」

エクレールの言葉にシンクは熱血教師のような台詞を言いながら再び紋章に手を入れようとしていた。

「時には諦めることも肝心なんだけどね

俺はボソリとつぶやいた。

ちなみに俺は時空間の移動ゲートを出そうとしたが、何かに弾かれてうまくいかなかった。

(まあ、転送術が使えるだけでも儲かりものかな)

俺が使える転送術は半径500m範囲内ならどこへでも一瞬で行くことが出来る物だ。

使いどこのとしては奇襲程度しかないが。

「勇者様～、準備整つたであつま～す！」

その時聞こえたリコッタの声にシンクとエクレールは後ろを振り向いた

「えつと……それは？」

シンクは、アンテナのついた機械を指差しながら聞いた。

「これは放送で使うフローニャ周波を強化・増幅する機械であります。自分が五歳の時に発明した品であります。今は大陸中で使われていてありますよ」

ある意味天才だなと俺は心の中で思っていた。

そんな中、リコッタはレバーを操作して機械を動かした。

「では、勇者様」

先程からポカーンとしているシンクにリコッタはそう言つた。

「あつ、ああ、うん」

シンクは自分の携帯を取り出し、画面を確認する。

俺は少し興味があるので、シンクの横から携帯の画面を覗き見る。すると圈外と表示されていたのがアンテナのマークに変わった。

「つまおおおおおー 立つたああああーー！ 漆い！ リコッタ凄いーー！」

「ありがとうございますー 感激ありますーー！」

シンクの言葉にリコッタも嬉しいのか敬礼のポーズをとった。
そしてシンクはどこかに電話をかけた。

俺は話の内容に興味もなければ聞く気もないでの、少し離れた場所で辺りを見ていた。

しばらくすると、電話を終えたのかシンクは携帯電話を閉じた。

「リコッタ」めん、もうちょっと繋げていい？ まだ他にも連絡したい人がいるんだ

「大丈夫ありますよ」

シンクのお願いに、いやな顔一つもしないリコッタ。
そう、ここまでは。

「あ、勇者様」

「ん？」

「良ければその”でんわ”と言つ機械、後で調査させていただけな

いでしょうか?」

リコッタはそう言つと、シンクの方に迫つて行つた。

「え、え、え!？」

「ちよおつとだけ分解して、構造を知りたいのです。見知らぬ機械を見ると自分は、尻尾の付け根と研究心がキュウキュウしちやうのあります~」

あ、やつさから腰を振つてゐると思つていたら、しつぽだつたのか。
と言つよりシシ「ミミビニも満載だな。

「ああ、いやいやいや…」

シンクは慌てて携帯を後ろの方に隠した。

「平氣であります、後でちゃんと元に戻すのであります
「分解しちゃうと保障が聞かなくなるんだって!」

シンクはもう叫びながら逃げ出した。

「大丈夫であります! 自分が補償するであります
「うわ! その補償じゃなくて、電話会社の…」

僕は一人が走つてゐるのを呆れてみていた。

「天才となんとかは紙一重と言つが……あれは一種の病氣だな

いや、病氣と言つよりは中毒か?

と並んでシンクはさつきからアクロバティックな回避をしている。

「はは！ それは心強い」

いつの間にか俺から離れていたエクレールが、嬉しそうな声を上げた。

と言つより、あれって電話か？

「エクレ、何か朗報が？」

シンクの手首を掴んでいたリコッタが、手を離してエクレールの方を見る。

「ダルキアン卿が戻つてこられる！」

「本当にありますか！？ ならコッキーも一緒にありますね」

「ああ…」

どうでもいいんだが、一体誰なのだ？

「誰？」

そう思つてみるとシンクがエクレールに尋ねた。

「ビスコッティ最強の騎士、ダルキアン卿と我らの友人ユキカゼだ」「二人ともとっても頼りになるであります」

シンクの問いかけエクレールとリコッタが答える。

(最強の騎士か。強いんだろうな)

俺は今度手合わせでもして貰おうかと考えていた。

言つておくが、俺はバトルジャンキーではない。

ただ単に相手の力量を見るのが好きなだけだ。

ちなみにリコッタはそう言いながら、シンクの携帯に田の焦点を合わせていた。

その眼は完全に獲物を狙つ田だ。

そんな俺の耳に何かの鳴き声が聞こえてきたので、その声の方向を見ると……

「ああ～珍しいでありますな、土地神様であります」

半透明のカエルのような生物と田玉一つで妖怪みたいな生物がいた。と言つより、今聞き捨てならない単語を聞いたような気がした。

「土地神？」

「貴様は本当に何も知らんな……土地に暮らす精靈に近い生き物だ」

「土地神様がいらっしゃるのは自然の実りが豊かな証なのであります！」

シンクの問いかけにエクレールの説明に続けて、リコッタもそう言った

「へえ～」

(土地神?)

俺がこの世界に干渉する絶対条件は、ここを担当する神に許可を取ること。

ここで言つなれば土地神だ。

今日の前にいるのは絶対にこいつらの言葉を理解できない。

もし出来ても俺が向こうの言葉を理解できない。
つまり、俺の希望は潰えた事になる。

(まあ、それならそれでいいか)

俺は天界に戻るという気はないので、戻れないのならそれはそれでいいかなと考えていたのだ。

但し問題は体の方だ。

「渉、ぼさつとしてるんなら置いていくぞ」

「お、おい！ まつてくれ！！！」

俺は立ち去るエクレールを見て、考えるのを中断すると慌てて後を追つた。

(ま、いか)

それが俺の出した最終的な結論だった。

そして俺達は、召喚台を後にするのであった。

第8話 お約束の（前書き）

今回なお約束のお風呂突入です。

第8話 お約束の

召喚台からお城の方まで戻ると、辺りは暗くなっていた。

「姫様のコンサーートに汗臭い姿でこられても困る。コンサーート前に風呂を使って来い」

「風呂ついでにどうぞ？」

エクレールの指示にシンクがお風呂の場所を尋ねる。

「案内図もありますし、中の人間に聞けばわかるでござりますよ」

リコッタの説明に、俺達は納得した。

そして俺達はお風呂場へと向かったのだが……

「ねえ、渉。みんなコンサートの準備で忙しいのかな？」
「ああ。とこつより、風呂場つてどこにあるんだ？」

シンクの疑問に、俺は適当に答えると風呂場を探す。
あれからかれこれ数十分はお風呂場を探し回っている。

(あ、そう言えば異国の字を読めるようになる術があるんだった)

俺はいまさらな事を思い出した。

異世界に行くときに字が読めないのは、非常に危険だ。
よつて字が読めるようにする神術があるのだ。
それを俺は忘れていた。

(……掛け出し)

俺は気を取り直して神術をかけた。

これでこの世界の文字は俺の知る言語になるはずだ。

「ん？ あれかな？」

そんな中、シンクが立ち止まりどこかを見ていた。
そこにはなにやら大きな建物がある。

「とりあえず行ってみるか」
「そうだね」

舗装された道を小走りで進むと沿道が俺達の動きに合わせて光って
いった。
本当にここでの文化レベルがわからない。

すごいんだが、そうでないんだか……。

なかは明るく解放的な空間になっていた

奥の方は敷居で遮つてあり、その向こうにも何かがありそつだつた。

「あ、ロッカー。イエス！ 大正解！」

テンション高めに喜ぶシンクをよそに、俺は服を脱いでいく。
そして神術で創造したタオルを腰に巻くと、浴場の入り口の張り紙
に目を通した。

そこにはじつ書かれていた。

『Open spa . This time for ladies
only』

(なんで英語なんだよ)

じつやら翻訳の指示を間違えていたらしい。

直訳すると『大浴場。この時間は女性専用』と記されていた。

(下の方にも何か書いてある)

張り紙の様な紙に誰かの絵が描かれていて、再び英語が書かれてい
た。

『In mirror now』

(ミルヒオレが中にいます……じつじつ意味だ)

「じつしたの難しそうな顔をして。早く入ろうよ

俺は首傾げでいると突然シンクに手を取られた。

「え、あ、おい！！」

「ひやつほおー！」

俺は突然の事になすすべもなく大浴場へと強制的に連れていかれた。
もう嫌な予感しかしない

「うわーすごいやー。露天だ」

確かに中はすごかつた。

横には数本の柱が立つていて、中世のヨーロッパに来たような印象を受けた。

そんな中、俺とシンクは階段を下りて行く。
すると、シャワーの音がした。

「あれ？ 先客さんかな？ って、どうして涉は後ろを向くの？」

「……」

突然後ろを向いた俺にシンクが聞いてくるが、俺は何も答えない。

俺はシンクを浴場から連れ出そうとするが、シンクは音のした方に近寄つて行く。

そして……

「勇者様？」

「……」「……」

一瞬静かになった。

俺は振り向かないとばかりに出口の方を見続ける。

そしてその静寂は桶が地面に落ちる音で一気に消え去った。

「きやあ！」

「うわあー！ 見てませんー！ 何も見てませんー！」

慌てた様子で騒ぐシンク。

俺はため息も出なかつた。

つて、そう言えば俺もここにこるんだからシンクの共犯！？

「すみません。勇者さまの前でこんなはしたない

（あんたが謝るのかい！）

俺は心の中で突っ込む。

「え、いやあの僕、まさか人がいるだなんて……まさか姫様がいるなどと思わなくて、本当にすみません」

シンクはそう言いながら俺の横まで移動すると、地面に落ちた桶に足を取られた。

「うわあー!?」

そして俺を巻き込んでお湯の中落ちた。
俺はすぐに後ろ向きで浮かび上がった。

「じめんなさい、私普段はこの大浴場には入れない物ですから、こ
うこう時ぐらいいはつて」

「えっと、こっちも色々とすみません」

俺は出鼻をくじかれながらもなんとか謝れた。
諸悪の根源のシンクはお湯の中に沈んでいた。

「あ、あの私も上がりますので、勇者さまたちほどひどいもつくり
りー！」

そう言つてその人は去つて行つた。

「ふはーーー！」

沈んでいたシンクは思いつきり立ち上がつた。

「シンクーーー！」
「あ、あの、勇者さま」

俺が怒り心頭に叫ぶのと同時に声がした。

「は、はーーー！」

声のした方を見ると、そこにはバスタオルを巻いた桃色の髪をした
少女の姿があった。

「この時、俺は初めて少女の姿を見たのだ。

「呪喰の事とか、これから的事とか。勇者をまたさにお話ししたい」ととかいっぽいあるんです。ですから、コンサートが終わったら少しお時間頂けますか？」

「は、はい！ それはもちろん」

「ありがとうございます。また後程」

そして少女は去つて行つた。

「はあ
「シンク、貴様」

俺はシンクを睨みつける。

「な、何かな？」

「明日鍛錬に付き合え！！ 徹底的にじっくりてくれる……！」

俺の機嫌も最悪な状態だ。

「そ、そういう言ひ方、ここ女湯じゃ……ないよね？」

「それはな

俺が答えよつとした時だった。

「わやああーーー！」

突然何かが割れるような音と共に、少女の悲鳴が響き渡つた。

「姫様！」

「ツー？」

俺とシンクはほぼ同時に浴場を出る。
そして素早く礼装に身を包むと、外に飛び出した。
外に出ると人の気配がした。

そこは……

「上か……」

大きな声でそう叫びながら、上を見ると屋根の部分に三人の人影があつた。

「われら、ガレット獅子団領！」

「ガウ様直属秘密諜報部隊！」

「――ジェノワーズ！！！」

色付きの煙を出し、派手な登場をしたのはガレット軍の奴らのようだ。

「姫様！」

「ビスコッティの勇者二人殿。あなたたちの大変な姫様は我々が攫わせていただきます」

黒い髪をした少女が淡々と告げた。

俺まで勇者にされているのはあれだが。

そして少女が手に抱きかかえているのが姫様なのだろう。

その姫様はさつきまで大浴場にいた少女だったが。

(と言つよつ、俺と姫様とは初対面なんだが?)

「「つかははミオン砦で待ってるからなあ」

「姫様がコンサートで歌われる時間まであと一刻半。無事助けにこられますか?」

そんな事を突つ込む間もなく、どんどんと話を進めていく三人。

「つまり大陸協定に基づいて要人誘拐奪還作戦を開始させていただきたいと思います。こちらの兵力は200。ガウル様直下の精銳部隊」

「で、ガウル様は勇者様のどちらかとの一騎打ちを」所望です

「勇者さんが断つたら、姫様がどうなるか」

(どいつもこいつも……)

俺の中で何かが切れて何かが目覚めた。

「受けてたつに決まってる! 僕は姫様に呼んでもらつたビスコッティの勇者シンクだ! どこの誰とだって、戦つてやる!!」

「上等だ!! 貴様ら諸共、この小野渉が灰にしてくれる!!!!」

なのでそう叫んでしまった。

こうして、姫様奪回戦は幕を開けてしまったのである。

第9話 姫様奪還戦開始！（前書き）

と並んで、今回よつこよこホンダ戦です。

第9話 姫様奪還戦開始！

ナレーターが実況を初めているさなか、俺とシンクは外へと向かっていた。

それはエクレールと合流するためであつたのだ。

「あ、エクレール！ 丁度いい所に……大変なんだ。姫様が攫われちゃつて、だから僕達急いで助けに」

」

そこにいたのはものすごい速度で走りながら、じつに向かっていくエクレールの姿。

(「、怖ッ！？」)

その表情はまるで鬼を思わせるような感じだった。

なので俺は何があつても大丈夫なように回避する準備をした。

「ううの、ど阿呆おおがあああああ！」

そして俺の予想も的中し、エクレールがとび蹴りを仕掛けようとしてきた。

ちなみに俺の位置はシンクの左側、つまりはエクレールのとび蹴りの攻撃範囲内だった。

俺は即座に後方にバックステップで回避するが、シンクはものの見事にとび蹴りを喰らい柱の方に吹き飛ばされた。

「痛いよ！ 何すんの？！」

「それはこっちのセリフだこのど阿呆！ 勝手に宣戦布告を受けてどうこうつもりだ！！」

「はい、はい？」

エクレールの罵声に、シンクが首を傾げた。
そしてこいつをものすごい形相で睨みつけてきた。

「そして涉は避けるな！！」

「避けるわ！！ 誰が嬉しくてわざわざ痛い目にあつか……！」

俺はエクレールにもう反論した。
俺は別にマゾではないからな！！

その後俺達は急いで姫様のいる場所へと向かつのであった。

3人称Side

「宣戦布告を受ければ、公式の戦と認めた事になる。普段の戦闘ならこぞ知らず、よりによつて姫様をあまつさえこんなタイミングで

……

ミオン砦に動物……セルクルに乗つて向かつている時、エクレールはシンクに対して怒鳴つていた。

「コンサートの姫様の出番まで、あと一刻半しかないんだぞ？
……聞いてるのか勇者！」

後ろにいるシンクに、エクレールは若干キレ気味に怒鳴つた。

「きつ、聞いてつうわああああー？　聞いてる！」

「大体、貴様は何でまともにセルクルにも乗れんのだ！！黒音は普通に乗れてただろうが！」

今にもセルクルから落ちそうなシンクに、エクレールが怒鳴りつける。

宣戦布告の一件でエクレールの機嫌は最悪であった。

「そんな事言われてもー！」

「エクレ、あんまり怒ると血管切れるでありますよ？」

リコッタの心配そうな言葉に、エクレールは前方へと顔を向けた。

「……エクレール、リコッタごめん。勝手な事して」

しばらくの間無言であつたが、突然シンクが口を開いた。

「僕の世界では、悪者が姫様を誘拐するのって、大変な事なんだ、だから…………」

シンクはそう言いながら体制を整えた。

シンクの言葉に、リコッタやエクレールは少なからず驚いている様子だった。

「黙つていられなかつた！……でも大丈夫！　姫様も助けるし、コンサートにも絶対間に合わせる！」

シンクはそう言いながら神剣『パラディオン』を手に具現化する。

「ふんつ！……当然だ」

「自分も微力ながら、頑張るありますよーー！」

「うん！ ありがとーー！ リコッタ、エクレール」

エクレールとリコッタにお礼を言つシンク達は、ミオン階へと向かう。

「む、そうだ。涉はどうした！」

「あれ？ そう言えばさつきから静かで……って、いないー？」

エクレールの問いかけに、シンクは後ろの方を見るが、そこには誰もいなかつた。

そう、なぜか涉の姿はなかつた。

「最後に私が見たのは、セルクルがいる場所であります」

リコッタが知つていていたことを告げた。

「と言つことは……」

「あの馬鹿者ーーーこんな時に一体何をしておるのでああああーーー！」

シンクの仮定をいち早く悟つたエクレールが、本田最高ボリュームで怒鳴り声を上げた。

これには二人は苦笑いを浮かべるしかなかつた。

ちなみに、その頃渉はと言えば……

「ですから、セルクルにお乗りになつた方がいろいろと便利ですと、申しあげております！！」

「だ・か・ら！ 僕はセルクルとかいう動物ではなく自分の足で行きたいだつて！！」

見送りに出ていたメイドの人と言い争つていた。

その原因是渉がセルクルに乗るのを拒否したからである。

「ぐどい！―― 一体何度言わせる気だ！！」

「貴方こそ！ いい加減分かつてください！――」

一人の喚き声が夜の空に響き渡るのであつた。

第10話 合流（前書き）

今回の執筆に2時間はかかりました。
出来はあまり期待しないでください。

第10話 合流

3人称Side

「……ふつー！」

「ひ……ぐう……ー」

ミオン砦内に武器と武器がぶつかり合つ金屬音が響く。

砲術師のリコッタのサポートもあって、何とか逃りつけた一人だが、中で待ち構えていた敵兵士の数の多さに圧倒され、ついに逃げ場が無くなつた。

「ふははははー！」

そんな時高き笑い声と共に、ガレット獅子団の將軍でもあるゴドワイン・ドリュールが姿を現した。

「親衛隊長も勇者も恐るにたらず！」

「リコからの砲撃、止まつちやつてるけど？」

ゴドワインの言葉にシンクは、背中合わせのHクレールに小声で話しかける。

「無理もない、砲術師は歩兵に詰められれば無力なんだ……むしろここまでよくもつてくれたと褒めてやりたい」

「勇者の坊主は我らが主、ガウル殿下の使者だ、広場まで来てもらおおー！」

ゴドワインの言葉と共に、歩兵達が一步前に踏み出した。

「小娘の親衛隊長に用はない。降参するなら、許してやるがお？
んん？」

「断るー。」

ゴドワインの提案をエクレールは即答で答えた。

「んん？ー。」

そんなエクレールの言葉に、ゴドワインは眉間にシワを寄せた。

「……そつか、なあらば、少々痛い目を見てもらおつかあああーー。」

兵士が差し出した鉄球の付いた大きな斧を取りながら、ゴドワインはそう言った。

「「勇者ーー。」

そんな時、一人はほぼ同時に声をかけた。

「……なんだ？」
「……そつかーー。」

しばらくの静寂ののち、一人はそれぞれの提案を話す。

「いいかよく聞けー。」
「エクレールー。」

「僕（私）がここに残るからエクレ（貴様）は先にー。」

一人はほぼ同時に言いきつた。

しかも内容も同じだ。

「 「…………え？」」

「だああああ！－－ なんでかぶるの－－」

「それは「」ちのセリフだ！－「」のスット「」画者が－－」

そして一人は痴話げんかを始めた。

Side out

俺は迷彩と気配の遮断をしてミオン砦内に侵入する」とに成功した。ちなみにメイドさんの隙を狙つて強行突破した。

そんな俺を待つていたのは……

「いいから行けって！」は危ないんだし、エクレなら砦の中とか詳しいでしょ？！」

「足止めなんて難しい戦場、貴様に務まるわけなかろうが！ 貴様じやせつさと行け！」

二人の痴話げんかだつた。

いや、これは言い争いとでも言った方がいいか？

シンクとエクレールの二人はこの世界に来たときに軽く戦つたおじさんと、歩兵達の前で痴話げんからしき言い争いをしていた。

理由は、どっちがここに残るかであった。

そしてこの二人のやり取りにおじさんの眉間のシワも、だんだんと大きくなつていつた。

俺は不意打ちが出来るようにタイミングを見計らっていた。

「女の子を危険な目に合わせる訳にはいかないの！」

いかで行く? 言ってんだぞ?!

それを知つてか知らずかは分からぬいか言い争う二人。

「ここは僕に任せて！」

いから行け！」

(ま、い、そろそろおじやんか限界を超えるぞ?)

心中でそつ警告を出す。

「もうう！ 頑固だなー！」

卷之三

そして、とうとうその限界が来た。

「ガキ共お！」の土壇場で、楽しいやり取りしてんじやねええ！

二〇一

おじさんは怒鳴りながら鉄球をシンクに向けて放り投げた。

「呼ばれなくとも、ド派手に登場！！」

俺は今だと思い、シンクの前に迷彩を解除して移動すると正宗を前方に突き付けるように構える。

「盾！」

その次の瞬間、とてつもない重圧が俺を襲う。

「渉ー？」

「……っくー おまけに一発！…」

俺がそう叫んだのと同時に、田の前にいた歩兵の半分が獣玉になつた。

そして俺の横に突き刺さるのは、神剣吉宗だ。

「ひおじやああー…」

そして俺は鉄球を横にそらせる」と、対処すると盾を解除した。

「悪い、かなり遅れた」

「遅れすぎだー！ 一体何をしていたーー！」

エクレールの怒鳴り声が耳に響く。

「あー、それは後で。今は……」

「お主は、今朝の小僧か」

俺は田の前にいるおじさんに意識を集中する。

「ええ、そうです。それにしてもこれは偶然？ それとも作為？」

「そんなことはどうでもいい！ 今朝の決着を、つけさせてもらおおうではないかー！」

おじさんは手に斧を、俺は両手に神剣を構える。

と言つより、あのおじさん縛り付けられて負けたのがよっぽど嫌だつたようだ。

そんな時、紫色の何かが何処からともなく、おじさんの背後を狙つように向かってきた。

それをおじさんは斧で受け止める。

「ぬああおおーーー！」

やがて斧の方が勝つたのか、それは大きく弾かれ、俺達の後方に突き刺さつた。

「IJの刀は……！」

エクレールが刀を見て声を上げた。

「塔馬より失礼仕つた！」

その声と共に俺達はミオン砦の屋根の方を見上げた。
そこには笠のようなものをかぶり、右手に杯を持った凛々しい顔の女性と何やら小動物がいた。

どうやらこの人がさつきの奇襲を仕掛けたらしい。

「おお、久しぶりで、」ぜるなエクレール。しばらく見ない内に大きくなつた
「ダルキアン卿！」
「ダルキアンだとお？！」

エクレールの言葉に、おじさんはそう言いながら、その方向を睨んだ。

「いかにも、そこの斧将軍と勇者殿達には、お初にお目にかかる。
ビスコツティ騎士団自由騎士、隠密部隊棟梁『ブリオッシュ・ダル
キアン』」

ブリオッシュはさすがに、巻物を取り出しそれをこすりて向けて
広げた。

「騎士団長ロラン殿からの要請を受け、助太刀に参った！」

そんな時、やぐらのよつたな場所から光何かがあつた。

「危ないっ！ 後ろ……！」

それに気づいたシンクはブリオッシュにそつ告げると、刀を構えた

「紋章剣」

その台詞と共に、ブリオッシュの背後に紫色の紋章が現れた。

「烈空一文字ッ！」

そしてブリオッシュは身体を回転させながら、居合いと共に矢が射
られた方へ刀を払う。

さらにその斬撃は矢を吹き飛ばし、弓兵達のいるやぐらを弧月状に
斬り裂いた。

斬り裂かれたやぐらは斜めに傾き、そのまま地上にいる歩兵達を道
連れにして地面へと落ちた。

俺はその一連の動作に、言葉を失った。

その動きに無駄はなく、そう言った催し物であれば間違いない一番
華麗で、最強の座に君臨できるほどの力だった。

「いやあ～助かつたで～」
「勇者殿」

そんな俺の驚きをよそに、ブリオッシュはシンクに笑顔でそう呟つ。

「あ～、いえ～！」

「お、口上の途中で～」
「たな……えーと、ビームで話したか？」

ブリオッシュは隣にいる小動物にそう聞くが、鳴き声をあげた。
おそらく犬であろう。

あまり関係はないから深く考えないようにならした。

「まあともかく、押しかけ助つ人の推参で～」
「わあ～、いや～尋常に」

ブリオッシュの台詞と共に、城外から花火が上がり、笑顔で刀を構えている彼女を照らした。

「勝負で～」

（しかし、この花火……誰がやつてんだ？）

俺の疑問も尽きたことはない。

第11話 ジェノワーズ（前書き）

渉の相手が、今回明らかになります。

第11話 ジェノワーズ

今俺は走っている。

と言うよりすごい光景だ。

花火が上がったかと思えば今度は空爆だ。

「エ、エクレ、涉。なんかすごいんだけど」

「ぼやくな走れ！」

「この程度まだまだ序の口だ」

セルクルに乗るエクレールをしり田に、俺は辛苦にそうシッコんだ。

「ダルキアン卿！エクレール・マルティノッジですーー！」

エクレールはブリオッシュに大声で呼びかける。

「おうー！」

対するブリオッシュは歩兵を切り倒しながら答えた。

「我々は中に突入いたします！姫様の救出に」

「おお、存分に努めてくるで！」やる

エクレールの言葉に、ブリオッシュはそう答ながら歩兵の攻撃を鮮やかにかわす。

「！」は拙者とヨキカゼに……」

ブリオッシュはそう言つと、剣を振り上げ紋章を発動させた。

「はあーー。」

そして剣から放たれた斬撃波で、多くの歩兵達が獣王へと変わつて行く。

「まかせぬで！」ゼウス

おじさんに剣を向けながら笑顔でそう言った。

「俺はエクレールと共に行く。お前の獲物は一騎打ちを！」所望らし
いからな

「了解！」

「し、仕方ないな。そこまで三つのなら連れて行つてやる！」

受け答えるシンクに対して、エクレールはそう言いながらそっぽを向く。

(俺、そこまでお願いしたか?)

俺は、そんな疑問を感じつつエクレールと共に走るのであった。

しばらく走った俺達は、ある人物たちと対峙している。

「やはり、貴様ら三馬鹿が出てくるか」

エクレールがやれやれと言つた様子でつぶやく。

三馬鹿と呼ばれた三人はある、ジエノワーズと言つ奴らだった。

「誰が馬鹿ですか！」

「馬鹿つていう人が馬鹿」

「そりや！ バーカ、バーカ」

ウサギ耳で弓を手にする女性に続いて、短剣を手にする黒髪の少女、大きな斧のようなものを手にするトラの姿を彷彿とさせる姿をした少女の三人が言い返していく。

(餓鬼か)

俺は呆れながら内心でつぶやく。

「貴様らの相手は、いろんな意味で頭が痛いが……」

「同じ親衛隊同士、このノワール・ヴィノカカオが通せんぼ」

「同じくベール・ファーブルタン。エクレちゃん、正々堂々と勝負です」

「まつ、三体一やけどな。ジョーヌ・クラフティ頑張るよお～」

ヴィノカカオは短剣を、ファーブルタンは弓を、クラフティは斧を構える中、エクレールも双剣を構えた。

「ビスコッティ親衛隊長、エクレール・マルティノッジ。切り抜け

て進ませても、ひつ

「同じく小野 渉。機嫌が悪い時にちよつかい出すとどうなるか。
たつぱりと叩き込ませて貰おうーー！」

そして、俺達の戦いが幕を開けるのであった。

第1-2話 戦闘（前書き）

今回は、涉がチートです。

第12話 戦闘

クラフティが大きな斧をこちらに向けて振りかざす。

「はあ！？」

「炎天の輝きよ、我らを守りたまえ」

俺はそれを目の前に防御壁を開拓せんだけで受け止める。

「なッ！？」

「つふ！」

驚く彼女に神剣を振りかぶる。
だが、感触がない。

どうやら避けたようだ。

しかしこちらは一人ではない！

「エクレール！！ 今だ！！」

「分かつて 」

エクレールの前方には、複数のナイフを手にしたヴィノカカオの姿
があった。

彼女もそれを認識している。

そして、それは一斉に放たれた。

俺の方は壁によつて守られているため大丈夫だが、エクレールの方
が心配だ。

「ベール」

「はーい」

ヴィノカカオの呼びかけに、ファーブルタンが矢を射る。

「させるかあ……」

「なー?」

俺は即座に展開した防御壁で防ごうとするが、中々の威力で押しつぶされそうになる。

なので、それを上空の方にベクトルを動かすことで、なんとか直撃は回避し俺達は体勢を整えた。

(三人の連携はほぼ完ぺき。これを崩さない限り勝利は難しい。それにここは大技を出したりすれば周りにけが人を出す可能性もある)

状況は悪いの一言だ。

今やるべきことは、この三人の連携を崩すことだ。

(崩すは無理だが隔離は出来るか)

俺はある術を思い出した。

それは本来、閉じ込めるための物だが、隔離するには十分の物だ。

「エクレール、これから俺が連續攻撃を仕掛けその後に一人を隔離させる。それまでのフォロー、頼めるか?」

「そんなこと、できる訳が……まあいい、渉の作戦にかけてみよう」

エクレールは渋々と言つた様子で、俺の提案をのんびくれた。

「さあて、お三方よ、防御と命乞いでもしておけ! 世界よ、我が

言葉に耳を傾けよ

俺は詠唱を始める。

「」の場に剣の雨を降らしたまえ。行け、レインソード

「ツー？」

俺の一言共に放たれた無数の剣は、三人に容赦なく襲いかかる。

「す」「いけど」

「無駄」

「ですわよ！」

三人はそれぞれの武器でその剣を防いでいく。
だが、それは俺にとっては一種のジャブだった。

「世界よ、我が言葉を聞いたまえ。我がいる場所とかの者達二名を
隔離したまえ」

「なツー？」

「うそー？」

俺がやつたのは空間隔離。

要するに、三人を隔離したのだ。

俺の前にはクラフティとファーブルタンの二名、エクレールの前に
はヴィノカカオがいる。

「引っかかったな。三人は最強だけど、分断されれば大したことは
なくなる。ちなみにその壁はどんなに強い攻撃をしても壊すことは
不可能だ」

「なるほど、やりますね」

俺の作戦に、そつと言つてくる。

はつきし言つて卑怯な手ではあるが、手段は選んでいられないのだ。

「では、始めましょうか。その幸せ、奪います。ロスとハピネス！」

俺は今いる空間に宿るフロニーヤ力の力を吸収した。

それを使い、俺の防御力をさらに高め、一人の防御力を低くしたのだ。

「おりゃああああーー！」

「よつと」

「隙だらけですよ」

「ほいつとー」

二人の攻撃を、俺は余裕に躱していく。

躱すだけなら絶対に問題はない。

だが……

「躱してるだけじゃうちらは倒れへんで」

「だろうな。だからこりこり切り札を使わせてもらひう

クラフティの言葉に、俺はそう答えると集中した。
使うのは紋章術。

(俺は使つたことがない。だが、気合と根性と運でやつてやるやーー・)

俺はそう意氣込むと、いつもと同じ感覚で自分の手に靈力を集める。すると、俺の背後に明かりが見えた。

「行きます

成功したと推測して、俺は次のステップに行く。
銀色に光り輝く一本の神剣を動かしてエネルギーをためる。
そしてエネルギーが最高レベルになつたのと同時に、一本の神剣を構える。

「裂空……」

そして俺はそれを一気に、一人に向けて振りかぶつた。

「一文字……！」

「え……？」

その技はブリオッシュの使っていた技だ。

俺はそれを一目見てコピーしたのだ。

とはいっても使い方が知らないので、不完全ではあるが……

(名前を付けるのならジョーカーか?)

そんな事を思いながら、土煙の上がった方向を注意深く見る。
やがて、土煙が晴れるとそこにま、フラフラと立っているのもやつ
との様子の二人の姿があつた。

「あの大技を受けても立つていられるなんてさすがだな

あの一瞬で防御をするとこ見ると、本当に強いところことが分
かる。

「でも、それもここまで……！」

俺は神速で一気に一人の懷に潜り込み止めを刺そうとした時だった。
突然扉が乱暴に開く音がした。

その方向を見ると、そこにはレオ閣下の姿があった。

第12話 戦闘（後書き）

紋章術：ジョーカー

自分で見た相手の紋章術をそのままコピーする。
ただし碌に使い方がわからない状態だと、本来の威力以下になつた
りする

第1-3話 あつけない結末と、新たな出会い（前書き）

今回は史上最悪な出来です。

何がと言つて展開がめちゃくちゃで、一部のキャラの口調が可笑しくなっています。

つこでにシントレジやなにシントレモです。

地雷を覚悟で、本文をどうぞ

第1-3話 あつけない結末と、新たな出会い

突然現れたレオ闇下。

「レオ闇下！？」

その突然の「」登場に俺は驚きのあまり、よそ見をしてしまった。
……そう、神速を使っていることも忘れて。

その結果……

「ガベラー？」

壁に盛大にツッコみました。

そして、そのまま俺の意識は闇へと落ちた。

「お、おい！ 大丈夫か、涉！！」

慌てながら声をかけてくるエクレールの声を聞きながら。

「ん……」

俺はやけにはっきりと聞こえてくる歌声に、目を覚ました。

「目が覚めたか」

「エクレールか。ああ、この通りな

俺は立ち上がりながら答えた。

「壁に突っ込んで氣絶とは、俺もまだまだだな。エクレールにも心配をかけたようだし」

「な、何を言つてゐ！ わ、私はお前のことなど心配などしていい！」

顔を赤くしながら俺の言葉を否定するエクレール。
何だか可愛らしい。

「ま、そういう事にしておく。で、状況は？」

「…………勇者が姫様をコンサート会場に送つて行つた。それで間に合つた様で、今姫様が歌い始めたところだ」

エクレールの説明によれば、今回は無事解決と言つことになる。
そして今聞こえているのは姫様の歌だ。

「中々、良い歌声だ」

「中々とは何だ！ 姫様の歌はとても素晴らしいのだ！」

”とても”を強調して言つてきた。

(感じ方は人それぞれ何だから大目に見て欲しいものだ)

俺はそう思いながら、姫様の歌に耳を傾けていた。

「あ、涉さん……」

歌が終わり、しばらくするとリコッタの声がした。

声のした方に目をやると、いっちに向かって手を振るリコッタと、その横には一段のたんごぶがあるジョンワーズに、銀色の髪をした少年とブリオッシュの姿があった。

「リコッタか、その様子を見ると、問題はないようだな」「ハイであります。勇者さまのおかげです」

俺の言葉に、リコッタは嬉しそうに答えた。

「で、あんたは誰だ」

「お、俺!? って言つか、そっちから名乗るのがセオリーだろー」

銀髪の少年の言つ事に一理があるため、俺は自ら名乗ることにした。

「俺は、小野 渉だ。好きに呼ぶと良い」

「俺はガレット獅子団領の王子、ガウル・ガレット・デ・ロワだ。ガウルでいいぜ」

ガウルと名乗った少年は、ガレットの王子のようだ。と言うより、こいつが首謀者か。

「ふん！」

「つて！ いきなり何すんだよー！」

俺はガウルの頭を、神剣の柄で軽く小突いた。

「そこ」の二人に言つたはずだ。“機嫌が悪い時にちょっかい出す”どうなるか。たっぷりと叩き込ませて貰おう”とな。叩き込めなかつたから王たるお前に叩き込ませてもらつた

「……俺は反省すべきなのかおじるべきなのか？」

「前者を取れば懸命だな」

ガウルのボヤキに、俺は素で返した。

「お館さま ！」

「ユキカゼ、戻られたか」

そんな時、後ろの方から少女の声がしたので振り返ると、後ろに束ねられた金色の髪にキツネ耳としつぽを生やした少女がブリオッシュの方に駆け寄っていた。

「……？ こちらのお方は？」

「俺は勇者殿の”おまけ”の小野 渉だ。呼び方は好きするとい。ちなみにこんな喋り方だがこれはいつも事ゆえ、気にしないでも

らいたい

俺はおまけの部分を強調して自己紹介をする。もちろんこれは、ある種の皮肉だ。

「私はビスコツ ティ騎士団自由騎士、隠密部隊筆頭ユキカゼ・パネ
トーネと申します。ユキカゼとお呼びください」

自己紹介を返してきた少女……ユキカゼと握手をする。

「ツー？」

手が触れあつた瞬間、手に電気のようなものが走った。

「どうかされたでござるか？」

「あ、いや。なんでもない」

ユキカゼの声にハッとするとい、俺はそつ答えて手を離した。

「なによ、テレポートしちゃって」

「ん？ なんか言つたか？ エクレール」

俺は後ろの方で怨念もろもろの様子でつぶやくエクレールに尋ねた。

「何でもない！ 私達も戻るぞー！」

「あ、おいー！」

歩いて行くエクレールについて行く形で、俺もミオン姫を後にした。
こうして、姫様奪還戦は幕を閉じたのであった。

第1-3話 あつけない結末と、新たな出会い（後書き）

次回からは日常編に移りたいと思います。

第14話 謁見と模擬戦（前書き）

ここから口常編です。

第14話 謁見と模擬戦

姫様奪回戦の次の日、シンク達はどこかに集められていた。

何でも姫様の謁見があるので言つ。

俺も来るようこと言われたが、そこには行かず、外で景色を見ていた。

「おや、これは涉殿ですかいぬか。ここで何をしてこるのでござるか?」

「これはこれは、ブリオッシュュ殿。空を見ているんですよ」

俺に声をかけてきたのは、ブリオッシュュだった。

「そのブリオッシュュ殿はよしてもらいたい。拙者の事はダルキアンで良い

「分かりました。ダルキアン卿

俺はダルキアン卿と呼ぶことにした。

”卿”を付けるのは、一応礼儀だ。

「謁見に出なくてよいのでござるか?」

「ええ。自分はそこに出るのはまだ活躍はしていませんし、そういうのは苦手な物で」

俺はダルキアン卿の問いかけに、そう答えた。

まあ、どれも本当の事だが、俺のようなものに出る権利はないしな。

「やつでござるか。向こうの方も終わったでござるよ

「え?」

ダルキンアン卿の言葉に、お城の方を見るとキレかかっているエクレールとその横にはシンクトリコッタ、コキカゼがいた。

「ツた？！」

「」の馬鹿者！姫様の謁見に出ないとは何事だ！

そして突然頭を殴られると、大きな声で怒鳴られた。

「俺はああいうのは苦手なんだって。なんというか固っ苦しこと言うか、なんというかよく分からぬけど」

「まあ、よい」

俺の返答に、エクレールはため息交じりにそう言つた。
どうやら諦めた様だ。

「あれ、シンク達は？」

「む、そいつ言えばコキカゼの姿も見当たらない」

どうやら俺を置いてどこかに行つたようだ。

「あ、ちょうどよかつた。ちょっと頼みたいことがあるんだが」

「む、言ってみる」

俺は顔をしかめるエクレールに頼みじとを伝えた。

場所は変わって騎士団の練習用の広場。

「兄上！」

「エクレール、それに君は確か……」

そこにいた肌色の髪をした男性が俺を見て名前を思い出そうとしていた。

「小野 渉です。以後お見知りおきを」

「これはご丁寧に。俺はビスコッティ騎士団の騎士団長、ロラン・マルティノッジだ」

騎士団長、ロランは俺と握手を交わすとエクレールの方を見た。

「で、どうした？ 今日の訓練は俺の担当のはずだが
「実は、渉と模擬戦をしようと思つていいのです

ロランの問いかけに、エクレールが答えた。

そう、俺の問いかけはエクレールとのお手合せだった。
親衛隊長と呼ばれるだけあって、その剣筋は良いに違ないと思つたからだ。

「渉殿と？ それはいい。皆の者いつたん休憩だ」

ロランは訓練中の騎士達にそう言つて、集まるよううに告げた。

「これから、渉殿とエクレールが模擬戦をするので、よく見ておくよ！」

何やら注目されているのが少々あれだが、まあやつていれば気にならなくなつてくるだろ？。

「それで、武器は何にするんだ？」

「俺は、この剣で行く」

そう言つて取り出したのは、神剣の吉宗だった。

「分かった

エクレールも剣を手にすると、お互に牽制し合ひ。やがて、エクレールが動き出した。

「はあーーー！」

「ほつとーーー！」

エクレールの剣劇を、俺は体を横に動かすことによって回避する。

「つづーーー！」

さうにエクレールは剣劇をさらに強める。

時には上から、また時には俺の脚を払いのけるよう。だが、そのすべての攻撃を俺は剣を使わず、体を動かすことで回避している。

「うむ、実に良い剣筋だ。さすがは親衛隊長だ

「貴様、私を馬鹿にしているのか！」

俺の評価に、エクレールは剣を振りながら言い返してくれる。その顔は若干本気になっていた。

「いや。逆に尊敬しているのさ。だが、所詮はそこまで。この俺にその剣を当てるのにはまだ早い」

「ツク！」

俺の軽い挑発に乗ったエクレールの表情が本気になった。

(俺も本気になりますかね)

俺はそう考え、吉宗をもう一度握り直す。

「はあ……」

「つふ！」

エクレールの剣劇を、今度は剣で受け止めた。

金属同士がぶつかり合う音がする。

それは、俺にとつては場を盛り上げる歌のようなものだ。

俺は、力の流れをそらしてエクレールの剣を払う。

俺が狙っているのは、剣を超えての攻撃だ。

戦いの中、一番有利になるのは、そのものの武器を失くすこと。

武器がなければ、こっちに武器が残っている時点で、それは大きなアドバンテージとなるからだ。

では、今回の場合はどうするか。

それは、エクレールの持っている剣を突き破ればいい。

力加減を間違えれば、エクレールに怪我を負わせるが、この吉宗は人体を切ることはできない特性を持つ。

「はあああ！！」

「そこ！」

そして俺はエクレールの剣に向けて吉宗を突き刺す。すると、剣は真っ二つに割れた。

俺の剣と一緒に

「なッ！？」

俺はそのこと、驚いた。

神劍は並大抵の事では折れることは決してない。

なのは、エグレーの持つ普通の鎧を貫いただけで、真ん中から真っ二つに折れたのだ。

(何だか縁起が悪いな)

俺がそう思っていた時だつた。

「今日は引き分けであつたが。何なんだ！　あの戦い方は「何だつて、普通にかわしていただけだ。後半はちょっと本気で行つたけど」

俺はエクレールの問い詰めに、動じずに答えた。

「お疲れ様」一人とも。素晴らしい戦いであつた」「あ、ありがとうございます。兄上」「恐悦至極です」

口ランたちのお褒めの言葉に、俺とエクレールはお辞儀をしてお礼を言った。

「あ、でしたらついでに皆さんで、面白いものを見せましょっか?」

「俺は構わないが、何をする気だ?」

「ほんのちょっとした手品です」

ロランの問いにそつ答えると、俺は地面上に落ちた一本分の剣を手にする。

「エクレール、手伝って」

「し、仕方がないな、手伝ってやるわ」

そして、俺は手品を始める。

「まずは、この剣の折れた部分をつなげます」

俺は全員に見えるように、エクレールが持っていた剣の刃が折れた部分をくっつける。

「で、エクレールこの部分を指でさしてみてくれる?」

「分かった」

俺の指示に、エクレールは洪々と言つた様子でつなぎ目部分を人差し指でさす。

(物体、修復)

俺は心の中で、そう念じる。

「はい、もう離してもいいよ
「なッ！？」

指を離したエクレールは、剣の刃を見て驚きの言葉を口にする。

「はい、この通り剣は元通りに戻りました

『おお～～』

俺が剣を突き上げると、見ていた人たちが簡単の声を上げた

「同じ要領で、こっちの方もやりましょうね」

「や、そうだな」

そして俺はエクレールと共に手品を続けた。

ちなみに、分かっているとは思つが、手品ではない。
これは俺の神術によるものだ。

そんなこんなで、模擬戦＆手品ショーは幕を閉じたのであった。

「あの一人仲がいいでありますねー」

「うん、エクレも楽しそうだ」

「仲良きことは良きかなでござる」

エクレールと渉が手品をしているところ、少し離れたところで笑顔で話しているオレンジ色の髪をした少女と、金髪の少年に茶色の髪をした女性がいたとかいないとか。

第1-5話 些細な異変と特別任務（前書き）

今回はかなり短いです。

第15話 些細な異変と特別任務

エクレールとの模擬戦の次の日、俺は姫様の「」厚意で割り当てられた部屋で畠を覚ました。

「…………」

だが、最初に感じたのは、倦怠感だった。
体がまるで鉛のように重い。

しかも何だか体がほてっているような気も。

(風邪か?)

俺はそう解釈すると、自分の体に治癒能力を高める術式を組むとベッドから起き上がった。

風邪程度でどうにかなるほど、俺は軟じやない。

そして俺はシンクが来ているようなトレーナーの色違い（青色）を着ると外に出た。

朝食を食べ終えた俺は、エクレールに連れて行かれたのはロランの

所だった。

「魔物退治！？」

そして唐突に告げられた内容に、エクレールが声を上げた。

「そうだ。姫様によると、ここから少々離れた森の方で大きめの魔物が姿を現したようだ。まあ、野生動物とは思うが、危険であるため退治する様にとの事だ」

ロランが説明するが、俺はちっとも頭に入っこない。体の調子が起きた時よりさらに悪くなっているのだ。食欲がなく、体も重くてまっすぐ歩けない。

(これつてもしかして……)

俺はその症状に心当たりがあった。だが、それは今の俺にとつては最悪な事態でしかない。

「…………る、渉！…」

「な、何だ！？」

考えに耽っていると、突然耳元で大きな声で呼ばれ、俺は驚きのあまり飛び退いた。

「『何だ』ではない！　話を聞いていたのか？」

「悪い、聞いて」「ふあ！？」

答えるよりも前に、エクレールに頭を殴られた。

「魔物退治だ！ 私とお前の二人で向かうのだ！！」「なぜに？」

「生憎、人員が割けないのだ。勇者殿も主席と共にお城内を歩いている。そこで一人に頼みたいのだ。引き受けてくれるか？」

俺の疑問に、ロランが答えてくれた。

俺の答えなど、既に決まっている。

「勿論ですよ。その任務、引き受けさせてもらいます」

「そうか。では、早速で悪いが準備を整え次第向かってくれ

「はい！」

俺とエクレールは元気に返事をする。

俺の体調の事が心配だ。

何も起こらなければいいが。

こうして、突如湧いて起こつた魔物退治が始まった。

第16話 魔物退治（前書き）

オリジナル展開です。
少々描写があれですが、ご覧下さい。

第16話 魔物退治

俺達は、ロランから言われた場所へと向かっていた。

「おい、涉

「何だ？」

そんな時、エクレールが若干不機嫌そうに声をかけてきた。

「なんでお前だけは歩きなんだ？」

「なんでって、こいつのほうが万が一の時に迅速に行動できるから」「それだったらこっちの方がよっぽどできるだろ」

俺の答えに、エクレールがツッコんできた。

「戦いのときに、剣を使って動物に乗つていらない者が、動物に乗つている者に対して出来る攻撃って何だかわかるか？」

「それは……」

俺の問いかけに、エクレールが無言になつた。

「動物の足を狙う事だ。そうすれば、動物が暴れて乗つているものを落としたりする。その時に奇襲をかければ勝利となるわけだ」

「つまり、涉はそれが起こらないようにしてみると云つ事か？」

「まあ、そういう事だ」

エクレールのまとめに、俺はそう答えた。

とうとう周りは、草木が生い茂る所となつた。
所謂危険地帯だ。

「気を引き締めていくとしよう」

「言わねなくても…」

顔を赤くしながら答えるエクレールをじり田に、俺は神剣を展開して前に進む。

そしてじばりく進んだ時であった。

「……」「

俺は周りの空氣の変化を感じ取った。

どうやらそれはエクレールも感じ取っていたようだ。

辺りに立ち込めるのは、異様な威圧感だ。

どうやらこれが魔物なのだろう。

エクレールは無言でセルクルから降りた。

「安心しろ、お前の事は出来る限り守つてやる」「なッ！？　お、お前は何を言つてるんだ！？」

俺の言葉に、エクレールが動搖しながら言つてきた。

「俺も男だしな。女一人守れないようじやあ……ねえ？」

「ふ、ふん！」

エクレールがそっぽを向いた時だった。
俺達の目の前に、それは躍り出た。

「これが、魔物か」

それは色は黒くやや大きめの動物だった。

その魔物は、鋭い牙をむき出しにして威嚇している。

（攻撃は主に噛みついたり引っ掻いたりと言った所か）

俺はすぐに相手の攻撃パターンを読み解いた。
数は2頭だ。

これなら手分けすればやれるだろう。

「エクレールそっちの魔物を頼む」
「分かった」

エクレールの答えを聞いた俺は、魔物へと向かつて行く。

「…………」

魔物は、俺に向けて突進してくる。

（おそらく引っ搔くなこれ）

俺はそう考えると神剣、正宗を一閃する。

「…………」

魔物が雄たけびを上げる。

俺がやつてのは足の爪の切断だった。

これで、引っ搔くと言う攻撃はなくなつた。

「最終審判、レクリエム！！」

そして、俺は超必殺技を魔物に向けて放つ。

「…………」

魔物は断末魔のようなものを上げながら、跡形もなく消滅した。

俺のやつた超必殺技は、一種の浄化だ。

今のは、魔物を浄化したことによつて魔物は消滅したのだ。

光と言うのは大量にあれば人を殺す武器にもなるのだ。

それは、闇にも言えるが……

(ツバキ?)

その時、めまいが俺を襲つた。

めまいはすぐに収まつたが、体の調子がさらに悪化していくのを感じた。

「涉、そつちはどうだ？」

「お、こつちは無事完了だ。そつちは？」

俺は、ふらふらになるのを必死に堪えてエクレールに問いかけた。

「私の方は大丈夫だ。これしきの事で後れを取るようではない」

「そう言えばそうだ

」

その時、俺はエクレールの背後で、鋭く光るもののが見えた。
よく見ればそれは魔物の爪だ！

しかも、魔物はエクレールに向けて飛び掛かるうとしていた。
それからは反射的だつた。

「エクレ！ 危ない！！」

「え！？」

俺はエクレールに注意を促しながら、魔物とエクレールの間に立つ。
防御は間に合わない。

ならば、俺自身が盾となればいい。

その瞬間、衣の切れる音が聞こえた。

その次の瞬間には、腕に痛みが走つた。

「ツグ！？」

「な！？ 大丈夫か！ 涉！？」

何が起こつたかに気付いたエクレールが慌てた様子で、聞いてきた。

「大丈夫だ。礼装で攻撃は防いだ。それよりも少し下がつて」

俺の傷は大したことでもなく、おそらくは擦り傷程度だろう。
なんせ、俺の着ている礼装は物理攻撃のダメージを幾分か抑える効
果があるのでから。

「あ、ああ」

「行くぞ。最終審判、レクリエム！！」

俺は、エクレールが下がったのを確認して、もう一度超必殺技を使した。

俺にもう一度飛び掛からうとしていた魔物は前と同じように消滅する。

「ふう。大丈夫……か」

俺はエクレールに怪我がないかを確認しようとしたが、それは叶わなかつた。

それは突然襲つた前のとは比べ物にならない眩暈の為であつた。そして俺は体から力が抜け、そのまま地面に倒れた。

「お、おい涉！？」

俺は、エクレールの慌てた様子の声を聞きながら、意識を失うのであつた。

第16話 魔物退治（後書き）

次回はエクレがちょっとぴりではあります、デレると思います（たぶんですが）。

第17話 相反（前書き）

もう17話、お気に入りも24件を突破しました。
本当に皆様ありがとうございます。

それでは、どうぞ

第17話 相反

「ん…………」

俺が目を覚ますと、そこは俺に割り当てられた部屋の天井だった。

(確か、あの時、魔物を退治して倒れたんだよな)

俺は簡単に倒れる前の事を思い起^レじていた。

「起きたか」

「あ、エクレール」

声をかけられた俺は、その方向を見るとそこには若干強張ったエクレールが立っていた。

「全く、いきなり倒れるから」

「心配してくれたのか?」

俺の言葉に、エクレールの耳が赤くなつた。

「な、何を言つ!… ただ…驚いただけだ」

そつ言つと俺が横になるベッドの横まで移動した。

「医療班が風邪だと言つていたが、いつからだ?」

「…明確な症状が出ていたのは起きた時からだ」

エクレールの有無も言わせるといった雰囲気に、俺は正直に答えた。

「体調が悪いのならなぜ出る前に言わない
「言つた所で、治るわけでもない。これは寝ていて治るよ! つなもん
じゃない」

俺の言葉に、エクレールは首を傾げる。

俺は”それに”と付け加える。

「俺が頓挫したら、エクレール一人で出撃になるだろ。何だかそれが嫌だつたんだよ」

「そうか」

エクレールが答えた後、部屋内が微妙な空気が漂っていた。

「その、何だ……背後から来た魔物から守つてくれただろ」

「ああ、あれか」

俺は、そのことを思い出しながら呟いた。

「その…………ありがと」

最後の方はすゞく小さかったが、なんとか聞き取ることが出来た。

「どういたしまして」

「へへへへへツー?」

その俺の答えに、エクレールは顔を真っ赤にして部屋を逃げるように出て行つた。

(全く、あいつは……)

俺はそのことに笑いながら思つと、別の問題を考えた。

それは、起きた時から起つていていた症状だ。

「物体化抵抗症状か」

俺達は天界にいる時は実体のない…………いわば魂のみの形で過ごします。これを靈体と呼び、シンク達のような存在を物体と呼んでいる。こういう世界では靈体でいる訳にもいかず物体化をしなければいけないが、物体化した自分に耐えきれなくなってしまつ事が多々ある。それが”物体化抵抗症状”と言われるものだ。
症状は発熱に眩暈、食欲不振と言つたものが主だ。
治すには天界へ戻るしかない。

（まあ、天界に戻れればの話だけど）

俺は苦笑い交じりに呟く。

（今日は一日ゆっくりと眠らしてもらおうかな）

俺はそう考へ、部屋に高濃度の靈力を散布する。

これで、擬似的にではあるが天界と同じ空間を作り出すことが出来る。

勿論、微々たるものであるが、異常状態を直すのには申し分ない。そしてもう一度ベッドにもぐりこんで寝ることにしたのであった。

第18話 星詠み／重大な擦れ違い（前書き）

今回から星詠み篇に入ります。

ちなみに、タイトルの意味は次回で明らかになります。

第18話 星詠み／重大な擦れ違い

翌日、擬似天界化のおかげか物質化抵抗も収まつた俺は、エクレからダルキアン卿のいる場所を聞き出し、そこに向かっていた。

「全く、エクレの野郎」

俺は先ほどエクレに殴られたお腹をさすつていた。
何で殴られたか？

それはほんの数十分前に遡る。

「おはようエクレール」

「……レ」

朝、たまたま見かけたエクレールに声をかけると、エクレールは不機嫌そうに何かを呟く。

「何だ？」

「私の事は、エクレと呼べと言つてゐるんだ！　この前もそう呼んでいただろつ……！」

何で言ったのかを尋ねると、エクレールは若干キレながら言った。
ちなみにこの前と並びの「ほ」魔物退治の時だ。

「あの時は無我夢中だったからで……分かったから、睨むな！」

俺は目の前で睨むエクレールを必死に止めた。

「エクレ……これでいいんだろ？」

「う、う、む……」

俺の言葉に頷くエクレの額はとても赤かった。

「顔が赤いけど、どうしたんだ？ もしかして風邪か？」

俺はそう言いながらエクレの額に手を添えた。

「う…………う」

その瞬間、エクレの額がさらに赤くなつていった。

「うああああ！……！」

「おふあああああああ……！」

エクレが思いつきり叫んだ瞬間、俺はお腹（しかも的確に鳩尾）を殴られた。

「」「」「」このアホ涉！ 勝手に騎士の額に触るなー。このー。このー。

「痛い！？ ちょっとー。それで蹴るのは反そ」「ふあー？」

そして今に至る。

「確かにいきなり額を触った俺も悪いが、鳩尾にパンチと蹴るのは無しだろ」

俺はそう文句をたれながら、エクレに教えてもらつた道をゆく。

「えつと、ここを右だつたよな」

俺は田の前にある分かれ道を右側の方に進む。

「お、あつたあつた」

しばらく歩くと、前方に立派な門が見えた。

例によつて上に掛けられていた木には何か書かれていたが、俺には読めなかつた。

(誰か呼ぶか)

勝手に入ると、どうなるかは田に見えていたので、俺は大きな声で

人を呼ぶことにした。

「「めんぐだわーー。」

「はーいー。」

俺の声に、中から声が帰ってきた。
その声からユキカゼだらう。

「ああ、涉殿」

「こんにちは」

出てきたのは、俺の思つていた通り、浴衣を着ていたユキカゼだつた。

「「こにちまじるよ。それでビーハーディーだるか?」

「ああ、ダルキアン卿殿に用があつてね。今どこにいる?」

俺はユキカゼにダルキアン卿のいる場所を尋ねた。

「お館さまは裏の方で釣りをしてこむでいれ。涉殿もやつてみるでいざるか?」

「うーん、そうだね。お願ひしようかな」

俺の答えを聞いたユキカゼは、古風な家の中に入つていった。
おそらく釣りの道具を取りに行つたのだらう。

(にしても、犬とか多いな)

俺は自分の立つている周りを見ながらそつ思つていた。
一瞬、ここが動物王国のように思えてしまつた。

「涉殿一、取つてきましたでござるよー！」

その後、釣り道具を貸してもらい、ダルキアン卿がいる場所へと向かつた。

「つこしてくるでござる」

「お館さま」
「ダルキアン卿、こんなにちは」
「おお、今日は釣り日和でござるよ」

ダルキアン卿はこっちは氣付いたのか、釣竿を持ちながら挨拶してきた。

「ダルキアン卿、ちょっと剣の稽古をつけて頂けないですか？」
「ふむ……分かったでござるよ」

俺の頼み」と、しばらく考え込むとダルキアン卿はそう答えると釣り糸を引き上げて、横に置くと立ち上がった。

そつ言われるがまま、ダルキアン卿について行くと、森の中にある広場に出た。

「何か、要望とかは、ござるか？」

「ええ、ダルキアン卿の使う紋章剣『裂空一文字』のコツを教えてほしいんです」

「ほう、涉殿は拙者の紋章剣が使えるのござるのか？」

俺の言葉に、田を細めて見てくる。

その田からは嘘は言わせないと言つた雰囲気が漂つ。

「ええ、俺の紋章術が一度見た相手の紋章術をまねることが出来る物なんです」

「それはす、じでござるの。しかし、どうしてコツを聞きたいのでござるのか？」

「俺がまねるのは”技”そのものでそれ以外は分からんんです」

ダルキアン卿の問いかけに、俺は包み隠さず答えた。

今いまでは威力調整が出来ずに、思わぬ事故を生む可能性がある。

「分かつたでござるよ」

そう言つて、俺はダルキアン卿から紋章剣のコツを教授してもうつのであった。

「アリ言えれば今日は勇者殿がここに来るといったてあるのアリだるよ」

「シンクが？」

「ジの教授も終わり、ダルキアン卿と釣りをしていると、唐突にそ
う切り出した。

「アリでアリれる。アリアリ来るアリであるが…………」

「あ、でしたら自分が迎えに行きます」

俺はダルキアン卿にそう言つと、釣竿を格納庫に入れてそのまま元
来た道を戻る。

全てはシンクを驚かすためだ。

そう、それが俺にとっての受難の始まりであるとも氣づかず。

第1-9話 星詠み～襲撃と合流～（前書き）

はい、また星詠み篇です。

第19話 星詠み、襲撃と合流

シンクを出迎えに言つた俺は会つ事もなく、フィリアンノ城まで来ていた。

そこで、エクレを探してシンクの居場所を聞いたのだが……

「はい！？ エクレ、もう一回」

「だから、へっぽこ勇者はもつ出したと言つてこる……」

そんな答えが返ってきたのだ。
俺は慌てて元来た道を引き返す。

「あ、おい……」

エクレの制止も聞かずには

「……」

引き返したのはいいが、俺はさりに困った状況に立たせていた。

「…………」

そう、道に迷ったのだ。

どうやらどこかで曲がる場所を間違えたようだ。
戻ろうにも、来た道も忘れてしまった。

つまりは、完全に迷子状態だ。

「…………歩くか」

俺はそう自分に言い聞かせると、ただひたすらに歩いた。

「ん？」

しばらく歩いた俺は、ある音を聞いた。
そっちの方向に走った。

「川だ……」

そう、そこにあつたのは川だった。

そして俺は思い出した。

ダルキアン卿と釣りをした場所が川であつた事を。

「ここを辿つて行けば、目的地に到着する……」

俺はそう思い川岸に降りると、上流に向かつて駆けた。

「なんで、こうなる」

しばらく進むと、川岸はなくなっていたのだ。

しかも上に行こうにも崖のようになつていて上がれない。

身体能力を駆使すれば行ける高さだが、今の状態ではあまりそういうのを使いたくはないので、俺はしおがなく川の中に入つて進むことにした。

……とても冷たい。

そうしてさりに進んだ時だった。

「グオオオオオオ！」

「うわあ！？」

突然川から飛び上がったのは、ものすごい大きさの変な魚みたいな生き物だった。

しかもそいつは俺をまるで飲み込まんとする迫力で口を広げていた。

「吉宗！？」

「グオオオオオオ！」

俺は吉宗を右飛んで避けながら魚に向けて投げつけた。

それは見事魚の腹部部分に命中した。

そして俺は……

「わっふー？」

全身ずぶ濡れになつた。

一応吉宗は魚焼きなどを切ることはできないので、大丈夫だ。
それにもしかしたら食材になるかもしれないと思い、吉宗に俺が生成したロープをくくりつけて、引きするように運ぶ。
それに伴つて俺の足取りもさらに重くなつた。
そして、俺は上流に向けて進むのであつた。

3人称Side

場所は変わつてダルキアンが釣りをしている場所。
そこには、シンクとダルキアンの一人の姿があつた。

「え！？ 渉がこっちに言つたんですか？！」

「うむ、そうでござるのだが、勇者殿は会つてはいないよつでござるな」

シンクの驚きよつからそつ捉えたダルキアンが顎に手を当てて考え込んだ。

「もしや涉殿は裏道を通られたでござるか？」

「裏道？」

ダルキアンの言葉に、シンクが首を傾げた。

「うむ、勇者殿が来られた道が主流でござるが、途中の分かれ道を

来られた方とは逆に行くと裏道につながるのではある。おわりへ涉

殿はそつちを通られたのかと」

「た、大変！ すぐに探さないと……」

シンクは慌てて立ち上がる。

そう、手にしていた釣り道具を手放して。

「いた！？ 誰だ！？ こんなものを落とした奴は！？」

「Jの声は……」

「涉！？」

二人は驚きながら、声のした方向を覗き込んだ。

そこには、水の中で覗き込む二人を睨みつけている涉の姿があった。

Side out

第20話 星詠み～夢と故郷～

俺は気が付くと変な場所に立っていた。

(「何は、どうだ?」)

それは一言で言えば恐ろしい世界だ。
周囲は薄暗い雲で覆われている。
時折、雷のよつた音が聞こえる。

(「何せ、フローヤルド?」)

俺はなぜかそう感じた。

それがなぜかは俺でもわからない。
そして田の田に倒れる青年がいた。

(あれって、俺?)

そう、その姿はまさしく俺だった。

「……つぐ」

そこにいた俺の姿をした青年はよつめき声を上げながら立ち上がった。
礼装は所々擦り切れしており、手や顔にも擦り傷があった。
そのことから、何がしらかの戦闘があつたと伺える。
そして、俺が負けたと言つ事もだ。

(「一体何が」)

「ツガー!?

目の前に立っている俺の姿が一瞬だがぶれた。
その理由はすぐに分かった。

(何だ? あの刀は)

凄まじい妖気を俺に向けて放つ一本の刀があった。
その刀は刃の部分がなかつた。

そして目の前にいる俺は、再び意識を失ったのか地面に倒れた。

(何なんだ、これは)

俺は全く理解が出来なかつた。

俺はさつきまでダルキアン卿たちの所にいたはずだ。
なんでこのよくな場所に俺が立つてゐるのか。
そして、一体これは何なのか。
俺には全く理解も出来なかつた。

(あれ、さつきの刀は?)

俺が気付いたのは、”俺”に向けて妖気を放つた刃のない刀が消え
ていると言つ事だった。

そんな時、ここに近づく人物がいた。

「む、あそこに倒れているのは……」
「お館さま、間違いないでござる。渉殿です

(ユキカゼ? それにダルキアン卿!?)

それはユキカゼとダルキアン卿だった。

「涉殿、無事でござるか！」

「涉殿！」

「う……」

一人の呼びかけに”俺”は意識が戻ったのか、ゆっくりと立ち上がつた。だが、かなりふらふらしている。

「無事で何よりでござる」

「つむ、とこひでこの辺に変な刀はなかつたでござるか？」

”俺”が無事だったことにほっと胸を撫で下ろすユキカゼに、真剣そうな表情で問いかけるダルキアン卿。

「ツー？」

その声を聴いた瞬間”俺”は驚いた風に目を見開いた。

「……る」

「ん？ どうしたでござるか？」

”俺”の呟いた言葉が聞き取れなかつたのか、ダルキアン卿は”俺”に聞き返した。

「逃げ……る」

”俺”は、一人に対してもう警告を発した。

それがどういう意味なのかは、誰も分からなかつた。

だが、それはすぐに分かつた。

「うああああああああああああああ！」

「ツ！？ これは！」

一渉殿……まさか！！」

”俺”から発せられる凄まじい妖気に、一人の顔色が驚きに染まつた。

”俺”は一人の動搖など無視して、両手に神剣と、俺がここに来たときに拾つた短剣を具現化すると、一気に一人の目の前まで移動した。

そして、”俺”は、両手に持つ剣を振り上げて、そのまま振り下ろした。

「殿」

誰かが呼びかける声がする。

「涉殿！」

再び聞こえた大きな声に、俺は飛び起きた。

そこは、先ほどまでいたような異様な空間ではなかつた。

「はあ……はあ」

「さつきからひなされていたよつで『じざる』が、体の具合でも悪いので『じざる』か？」

「あ、いや。ちよつと変な夢を見ただけや」

俺は心配そうに尋ねてくるユキガゼにそつ答へた。
今気づいたが、体中がとても暑かつた。

(夢か)

それにしては本当に妙にリアリティのある夢であるよつに感じた。
あれはただの妄想の産物なのか、それとも……

「渉も、食べなよ」

「…………頂きます」

皿の前に座つてこるシンクに知りられるまま、前にある料理に手を付けた。

「そう言えば、渉殿の故郷の話は聞いていなかつたでござりぬな」

「あ、僕も聞きたいな」

「拙者もでござる」

シンクの故郷の話からなぜか俺の故郷の話になつていた。

しかも、全員が聞きたそうな表情で見ており、どうにも話さないと
言つ方法はなかつた。

「……俺は、もし帰れるとしても、おそれてここに残るだらうな
「それは、どうして?」

俺の言葉に、シンクが理由を聞いてくる。

「……この世界が故郷より恵まれてゐるからだ」

そして、俺は故郷の話をした。

「俺の故郷はな、とにかく何もない

「何もない……とは?」

「そのままの意味だよ。水も、木も人もいない只々真っ白な空間。

あるのは青い空だけ。夜もなければ雨も降らない」

ダルキンアン卿の疑問に、俺はそう答える。

俺がいる世界、天界はまさしくその通りの世界だ。

「そ、そんな世界で良くいられたよね?」

「そんなの、外の世界を知らなければ、暮らせるもんさ。まあ、外
の世界を体感したから、一度と帰ろうなんて気はないけど」

天界で言い伝えられているジンクス、それが”下界に行つた神族は、二度とここには戻らない”と言つものだつた。

それもそのはずだらう。

下界の方が天界よりも優れていて、楽しい世界なのだからよっぽどの狂信者でなければ戻りたくもないだらう。

まあ、俺もその戻らない部類の一人になりそつだが。

「そ、そ、それでござるか。もし永住するのであれば、ミルヒオーレ姫に相談せぬといけないでござるな」

「ま、まあもう少し考えてから決めるとします」

ダルキアン卿の言葉に、俺はそう答えると、そのまま料理を一口食べた。

(まあ実際、世界との契約がある限りここにいるのは難しいんだけど)

それこそが俺が永住を済る理由だつた。

このような下界にいる限り物体化抵抗症状……劣化は止まらない。

今は仮想の天界を構築しているが、それもいつまで持つかは定かではない。

それでもここに残ろうとするのであれば……

(あれを使う……しかないか)

俺はそう考えると、複雑な心境になつた。

それは、俺にとつては天敵とも呼べる物だ。それをえばここに残ることも十分可能だ。

だが、ここに残つてまで何になるのかが決まっていない以上、それ

をやるのはあまりにも軽率すぎる。

最低でも、ここにいる理由を見つけなければいけない。
全ては、その選択を後悔しないために。

俺は、一人でそう考えながら料理を食べるのであった。

第20話 星詠み～夢と故郷～（後書き）

今回は、色々と付箋を貼りました。
次回で星詠み篇は終わります。

第21話 星詠み～最悪な未来～（前書き）

いよいよ星詠み篇も終わります。

今回、衝撃の未来が明らかになります。

それでは、どうぞ

第21話 星詠み～最悪な未来～

あの後、ダルキアン卿のいた家のような場所からお城に戻ったシンクは、メイド長に半ば強引にどこかに連れていかれた。

俺は、いやな予感がしたためシンクを見捨てて屋根に飛び乗つて隠れた。

人間自分が一番大事だ。

まあ俺は人ではないし、人としては最悪な部類に入るが。

「シンクは姫君と密会か」

シンクから伝えられた言葉を呟いた。

「俺はとことん姫の階級を持つものとは縁がないみたいだ」

俺は苦笑いを浮かべながら呟いた。

まあ、昔は姫と言つ階級はなかつたからそれも当然だろつけど。

「それにしても、星がきれいだ」

俺は隠れるつもりで登つていた屋根から降りることも忘れて、星空を見ていた。

(それにしてもあの夢、本当に夢か?)

俺は考えた。

あの内容が夢と言えるものであるのかを。夢と片づけるにはかなり無理がある。

それほどきつい内容だったのだ。

しかもリアリティもあった。

(まさかとは思いたくないが、まさか……)

俺には一つだけ心当たりがあつた。

ダルキンアン卿から聞かされた星詠みでの未来を覗むのと同じ効果を持つそれを。

そして、それの恐ろしさを。

「…………俺がやるべきことはこここの世界の人を守る」とじじゃない

俺は自分に言い聞かせるようにつぶやく。

世界の人を全員救うなど不可能だ。

何かしらかの代償きせいが必要なのだ。

「俺に出来るのは、最悪の事態を避けること。ただ、それだけだ」

そんな俺の小さな決意は、風によつてかき消された。

ガレット獅子団領

その中のある部屋から何かが割れる音が響いた。

部屋の中では、レオ闇下が悔しそと苛立つ表情で立っていた。

「くそ、またか！」

レオ闇下はいら立ちをあらわしながら呟く。

「戦を済ませて帰つても、やはり何も変わらん。いや、かえつて悪くなつた！」

レオ闇下はそう言いながら悔しそうな表情で上を見た。
その拳は、固く握られていたことから、その悔しさ、苛立ちはどの物であるかが分かる。

「そして強くもないはずの儂の星詠み、なのになぜ、いつまではっきりと未来が見える…」

レオ闇下のやつていたこと、それは星詠みであった。
そしてレオ闇下の前にある映像版に映し出されていた物は、血を流して地面に倒れている勇者シンクと、ミルヒオーレ姫だった。

「ミルヒだけでもなく勇者も、この世界の者も死ぬ

映像版の下に文字が書かれていた。

『「ヒクセリー・ド」「ミルヒオーレ姫と「バラディオン」の主勇者シンク、およびフロニヤルド王国にいる者、30日以内に確実に死亡。この映像の未来はいかなることがあっても動かない』』

そこには、最悪な未来が記されていた。

「なぜだ、なぜ涉がこの世界の者を……あの一人を殺すのだ……」

映像には倒れる一人の他に一人のそばに立つ、不気味なほどに無表情の涉が映し出されていた。

その姿は背中に黒く染まつた翼があり、髪の毛は黒から銀色に変わっていた。

さらには涉の周りからオーラのようなものが溢れだし、その手には神剣正宗と短剣を持っていた。

「星の定めた未来を知らぬが、かような出来事、起こしてなるものか！」

レオ闇下はそう啖呵を切ると部屋の一 角へと向かう。

「貴様を出すぞ、グランヴェール！ 天だらうが星だらうが、貴様となれば動かせる！」

レオ闇下の視線の先にあるもの、それは……言葉では言い表しえかないオーラを纏っている一本の斧だった。

そして、それが起ころるのは翌日の事であった。

第22話 襲いくる夢と宣戦布告（前書き）

みづやく物語も終盤。

ほんのちょっとした伏線を張らしていただきます。
それでは、どうぞ。

第22話 襲いぐる夢と宣戦布告

(また、夢か?)

俺が立っていたのは、再びフロニーヤルド王国のどこか。

(なッ!?)

俺は、目の前の光景に思わず息をのんだ。
その光景は、血を流して倒れる姫君と、シンク、そしてエクレ達の姿。

(一体何が…… ッ!?)

俺は突然上空から鋭い殺気を感じた。
武士の勘で、俺はすぐにその場を離れた。
その瞬間、まるで地面が抉れるような轟音を立てて、何かが着弾した。

「二、これって……神剣正宗」

クレーターのように陥没している所に突き刺さっていたのは、俺が使う神剣正宗だった。

「でも、どうしてこんなものが上空から ッ!?

再び殺氣を感じた俺は、素早く移動する。
その瞬間再び轟音と共に地面が抉れた。

(これは夢なんだろ？ なんで俺を襲つてくる？ と叫びながら……)

「どうして、俺は話せるんだ？」

夢であれば、俺は声を出すこともできない。
なのに、俺は口から言葉を発していた。

そして、俺は上空を見た。

そこにいたのは

「なッ！？」

真っ黒な礼装を身にまとい、黒い翼を広げた”俺”だった。
だが、その異様な姿はそれを俺だと思わせない。

「…………」

理解できない雄たけびを上げたそれは、俺の方向に陣を展開する。
その形は……

「あれは、闇属性！？」

光に対抗する属性の闇だった。

そしてそれは一気に二つちへと向かってきた。

「ツク、靈言の盾」

俺はそれに対して光属性の壁を形成する。

着弾とともに、とてつもない重圧が襲つてきたが、なんとか耐えき
れた。

「…………！」

次は炎属性の神術を放つてくる。
それを、前と同じように盾で防ぐ。

(一いつや、攻撃しないとまずいな)

「一撃で決める！ 最終審判……レクリエム！――」

俺は両手に持つ神剣を上空に振り上げる。
すると、一本の強大な光となり、“俺”へと向かう
この技は、どんな穢れたものでさえも一気に浄化することが出来る
優れものだ。

出来ないのは、俺自身とバイパスをつなげた場合だけだ。

「…………！」

”俺”は雄叫びを上げると再び円陣を展開した。
その属性に、俺は言葉を失った。

「あれは…………無属性の反射特化属性とも言われる風属性！――」

無属性は、炎や雷と言った三元属性や光と闇と言った極限属性とは
別の物だ。

これには反射特化型の属性である”風”や、回復に特化した”土”
の二種類がある。

そして、俺の放った技は、最強の威力を誇るレクリエム。

だとすれば、この後どうなるかは想像できる。
レクリエムが”俺”に着弾した瞬間、それは一旦消滅し俺に向けて
放たれた。

これが、風属性の恐れしさだ。

俺も使おうとしたが、この属性は使つこと出来なかつた。

(「ここまでか）

俺はあきらめていた。

それは、この技の威力が分かつていてからだ。
どんなに素早く逃げたところで、射程圏内から逃れることは不可能
だ。

そして、俺は白く眩い光に飲み込まれた。

「…………です……早く起きてくれださい……」

「わああああ！？」

突然耳に聞こえてきた少女の声に、俺は思わず飛び起きた。

(はあ……夢……だつたのか?)

それにしては納得が出来ない。

「渉さん!! 大変でありますよーー。」

「な、何!?!?」

思考に耽つていると、リコッタの叫び声に引き戻された。その後、リコッタから伝えられたことをまとめると次のようになる。まず、突然レオ閣下が、ビスコッティに宣戦布告をした。そしてそれの懸賞をガレットの宝剣、『魔戦斧グランベール』と『神剣エクスマキナ』が賭けられたとのこと。しかも、それには「つちもそれに見合つものをかけなければいけなくなり、それは宝剣であると言つ」と。

「話は分かった。とりあえず、着替えたいから外で待つてくれる?
? 2分で終わらせる」「リ、了解であります!」

俺はリコッタが出て行つたのを確認すると、一息ついた。

「今回の、宣戦布告が、あの夢と関係がなければいいんだが」

俺は不安だった。

俺が見た一連の夢。

それは”予知夢”だ。

俺の場合、視ることはかなり少ない。

しかも見たら俺の場合は必ず現実のものとなってしまう。つまり、俺はこの手でエクレやシンク達を殺すことになると呟つのだ。

「……ついに、選択の時が来たか」

俺は再びため息をつくと、着替え始めた。
そして、着替えが終わつた俺はテーブルの上に置いてあつたあるものを持つと、部屋を後にした。

(最悪な事態だけは回避しないと)

そんな、俺の小さな決意と共に。

第23話 最悪な未来を変える為に（前書き）

今回より、少しずつ山場へと移っていきます。
それでは、第23話どうぞ

第23話 最悪な未来を変える為に

シンクとコッタ、そしてユキカゼと合流して、外に出た。すると、一部が騒々しかつた。

そして時たま聞こえてくる少女の声。

「あの子、もしかして……」

シンクも気づいたのか、そう眩いた時、ユキカゼが突然その場所へ向かつた

「H!!オ、どうしたでいれるか?」

「パネトーネ筆頭! いえ、ガレットからの密偵が騎士団に化けて

青色の短髪の青年…… H!!オがユキカゼの問いかけに答えた。

「密偵ちやうつて」

そこにいたのはガレットの隠密部隊のクラフティだった。

「つむははるお方から、勇者シンクと傭兵の涉宛ての秘密のメッセージを持ってきただけや!」

俺とシンクの姿を見るや否や指を指してそつ告げてきた。

「僕宛ての、メッセージ?」

シンクは真剣な表情で、そう呟いた。

俺とシンクはクラフティと共にある場所へと向かっていた。
それは、彼女が持ってきたメッセージに話があるので来るようひと
いつた内容の事が書かれていたからである。
ちなみに、俺以外の二人はセルクルに乗っている。

「あ……」

そしてフイリアンノ城を出て少し歩いた森に、黒いセルクルに乗つ
たガウルがいた。

「シンク、それに渉。突然呼び出して悪かつたな
「それで、どうしたの急に？」
「決まってるだろ。今回の戦の事や」

シンクの問いかけに、ガウルは即答した。

「今回の戦は、ゴドワインも反対なんだ。どうにも納得がいかねえ
「ことも多い」
「こっちでも、ガレットは本気でここを侵略する気なんじゃないか
つて」

確かに、道中すれ違う人たちは全員不安げだったのを覚えている。

「いくら姉上でもそれはねえ。ガレットとビスコッティは友好国として、何代も前から支え合ってきた。それをいまさら侵略なんぞ、道義もたたなければ意味もねえ」

確かにそうだ。

なぜ侵略するのか。

それにはそれなりの理由があるはずだ。

俺には、レオ閣下が恨みつらみで侵略をする暴君には思えなかつた。だが、その理由は思い当たらない

（いや、もしかしたら……）

俺は推測ではあるが、理由が分かつた。

（確かに、星詠みは未来を覗くこともできるんだつたよな？ もしレオ閣下が星詠みをして、未来を見ていたとすれば）

しかも、その未来が残酷な物であつたならば、レオ閣下はそれを避けたいはずだ。

もちろんこれは推測だから間違つてゐる可能性はある。

だが、見当がつくのと着かないとでは大きな違いがある。
気が付けば、一人の話は終わり、ガウルはこの場を去つていた。

「シンク、悪い。一人で戻つてくれ

「あ、渉！？」

俺はシンクに一言告げて、答えを聞かずにガウルの後を追つた。

「ガウル！」

俺はガウルに追いつくと声をかけた。

「何だ、渉？　まだ話があるのか？」

「ああ、渡しておきたいものがある」

いつになく真剣な様子のガウルに五つの腕輪を渡した。

「何だ、これ？」

「それは俺が作つたお守りだ。念じるだけで3回分の防御か、1回分の完全回復をすることが出来る。これをレオ闇下やジエノワーズに渡してくれるか？」

「別にいいけど、どうしてだ？」

俺の頼みに頷くと、ガウルは俺に理由を聞いてきた。
俺は、一瞬誤魔化そうとも思ったが、正直にいう事にした。

「今回の戦で大量の犠牲者が出る可能性がある」

「何ー？」

俺の言葉に、ガウルは驚きを隠せなかつたようだ。

「どういう経緯かは分からぬ。だから、万が一の時にこれを使つてそんな事態を食い止めてほしい。俺は戦えないから」

「それって、どういう

「俺の話はそれだけだ。後それは万が一のとき以外使うなと言つておいて」

俺はガウルの言葉を遮つてそう伝えると、そのまま一人に背を向けて歩き出した。

(絶対に食い止めてやる。その為ならば、この命、力。すべてをかけてやる)

俺は再び強く決心しながら、フィリアンノ城へと戻った。

道中、花火が打ちあがつたことから、ビスコッティは、今回の宣戦布告を受けるようだつた。

第24話 開戦の日（前書き）

よつやく、クライマックスに入ります。
どのような展開になるのかを、「」覗くだせー。

第24話 開戦の日

とうとう戦の日が訪れた。

「…………うん。快調だ」

俺はフイリアンノ城外で、自分の力を確認する。その力は、未だ衰える所を知らない。いや、ここに来る前より快調のような気がする。

「……」
「リリが正念場だ」

俺は自分にそう言い聞かせると、フイリアンノ城へと戻った。

姫君から作戦内容を伝えられたのは、戻つてからすぐの事で半分聞き逃したが、重要な事だけは聞くことが出来た。それは、俺がシンクやエクレ達と同じ隊列であること。作戦を聞き逃すなど、武人には重大なミスだが、まだ挽回するチャンスはあるだろう。

「む、涉か。準備は出来たのか?」

「お、エクレ。いいところにいた

不機嫌そうな表情で、俺を見ながら声をかけてくるエクレに俺はそう返した。

「どういつ意味だ？」

「いや、これを受け取つてもらいたい」

そつ言いながらエクレに差し出したのはガウル達に渡したのと同じ腕輪と、銀色のさやに入った一本の剣の一いつだつた。

「何だ？」「これは」

「その腕輪は、3回分どのよつたな攻撃でも9割のダメージを軽減させるか、1回のみダメージやけがを完全回復することが出来る代物ぞ」

俺は不思議そつに俺の渡したものを見るエクレに、ガウルにしたのと同じ説明をする。

「もう一つの剣は、名称は一応ラグナロク。通称神殺しの剣だ」「なッ！？」

神殺しと言つ言葉を聞いてエクレが目を見開いてこつちを見る。

「その腕輪は姫君やリコッタあとは自分で身に着けておけ。そしてその剣と共にエクレに頼みがある」

「な、何だ……頼みつて」

真剣な面持ちで俺の頼みを聞こつとするエクレ。

「もし、俺が姫君やシンクを襲った際は、その剣で

そして俺はその言葉を口にする。

「この俺を貫け」

「なッ！？」で、出来るわけないだろ！」

俺の頼みに驚いたエクレは、猛抗議する。

「それであれば、全員が死ぬことになる。それでもいいのなら、やらなければいい

「……」

エクレは何とも言い難い表情を浮かべる。
その両手は強く握りしめられていた。

「何、心配するな俺はそれで貫かれても死ぬことはないから
「渉……お前は一体」

俺の言葉に、エクレールが問い合わせてきた。
俺はその問い合わせの趣旨に気付いていた。

「それは、この戦が終わった時にすべてを話す

俺はエクレの問い合わせにそう告げた。

「全てを終わらされたるんであれば、俺の一番好きなエクレにして

貰いたい

「ツー？」

俺の言葉に、エクレが今まで以上に顔を赤くした。

(何を言つてゐるんだ。俺は?)

俺は自分の口から出てきた言葉に、恥ずかしく思いながらすぐに謝ることにした。

この間のように鳩尾への一突きが来たらたまたものではない。

「悪い。変な事を行つたな」

「いや……」

エクレはそれ以上言葉にすることが出来なかつた。

そして少しばかり話をした俺は、そのままエクレに背を向けた。

「あ、姫君やリコッタたちに”有事の際以外では使つな”と伝えておいてくれ」

言つ忘れたことを言つて、俺はそのまま歩く。

「これで、すべての布石は打ち終わつた。後は開戦を待つのみ

勝負の時はすぐそこまで迫つて來ていた。

第25話 開戦と、混乱する戦場

その後、隊列を築いて俺とエクレール勇者シンクと、ダルキアン卿にユキカゼは指定された場所へ向かつて行った。
ちなみに、俺はセルクルには乗らずに歩いている。

「勇者殿とエクレールそれに渉殿とは、また一緒に組でござるな」「はい、残念ながら私がアホ勇者たちの面倒を見ないといけませんので」

エクレの”アホ勇者”と言つ言葉にシンクは落ち込み、ユキカゼはそれを見て静かに笑つていた。

「と畜生より、俺はこいつほど馬鹿ではないぞ」「勇者殿、渉殿。相方とは仲良くしないといけないでござるよ」「なんで僕に言つんですか！ エクレが僕をつんけんするんですよ！」

ダルキアン卿の軽い注意にシンクが反論した。

「と言つより、俺のボヤキをスルーしないでください…」「やかましい、貴様らがアホな事ばかりするからだ」

ジト目で俺達を睨みながらそう呟くエクレ。

「アホな事？」

「勇者殿は、出合つた初日は、おっぱい揉んだり服を剥いだりしたらしいのです」

何のことかわからないダルキアン卿にユキカゼが説明した。

「ほほう、それはそれは」

「「誤解です！…」」

二人の声がハモツた。

と言つよりシンクの場合は絶対に違つ。

「と言つよりユッキー！ なぜそれを知つている…？」

「ソコから録画したものを見せもらつたので」「やれる」

そりゃ言えども、カメラのような器材もあつたっけ。

「勇者殿もなかなかどうして大胆で」「やれるな」

「あれは本当に不幸な事故で」

あの時の事を思い出したのか、エクレはセルクルに乗りながらシンクを蹴つていた。

ものすごく器用な事をする二人だ。

俺以外のシンクやエクレ、ダルキアン卿の腕には俺が渡した腕輪がつけられている。

準備は万端だ。

そして、俺達は指定地点へと向かつた。

『さあ、午後に入り食事も終えたビスコッティ、ガレット両軍。現在チャパル胡椒地帯で戦闘開始の合図を待つております』

「いいか？ 合図があつたら私たちは最短ルートで、その先に抜け

る

「うん」

「了解」

ガレット軍と対峙しながらエクレの指示を頭に叩き込む。

「開幕直後なら皆橋やフィールドを抑えようと躍起になる。私たちなど田にも止めぬはずだ」

「分かつた」

「砲術主体！ 砲撃はしなくて結構ですので、とにかくエルマール主席を守つて私たちに付いて来てください」

『はい！』

エクレの指示に全員が返事をする。

そして……

花火が打ちあがり戦が始まった。

両軍が一斉に動き出す中、俺達は計画通り駆け抜けようとしたが。

「ヒイツハウー！」

「うおわあー！？」

突然現れたのはものすごい怖い形相をした者達だった。

「獲物がいたぞ」

「全員で囮め！」

「ち、ちょっと！ 話が違う！」

「ええ！？」

突然の事態に一人が慌てる。

さらに、俺の横からも同じ連中が迫つて来ていた。

「弓放て！！」

さらに追い打ちをかけるようにガレットからの弓攻撃。

それは一人の前方と横側から。

「横はこっちに任せとけ！！」

「「了解！」」

僕は一人にそう言つと、この間ダルキアン卿から完全に教わつた紋章剣を使う。

「行くぞ！ ダルキアン卿直伝！」

すでに展開してある神剣に、光が灯る。

「裂空、一文字！！」

そして放たれた一つの閃光は、矢を吹き飛ばす。
だが……

「死ねえ！！」

「つと！？」

迫つて来ていた顔に切り傷のついた男達5・6人の奇襲にあった。俺はそれを巧みに躱したことでなんとかなった。

「やっぱり動物に乗らない方が機動が良い」

そんな事を呟いている中、どうやら俺は囮まれてしまつたようだ。周りには10人の兵士。

たつたと付けた方がいいかもしれない。

「お前を倒せばレオンミシェリ閣下から、『豪美がたんまりと出る。だから、朽ち果てろお！』」

一人の兵士がそう言つて周りにいた兵士たちが俺に迫つてくれる。だが、それでも俺には笑う余裕があつた。

「笑止。たかが10人で俺を倒すことなど、不可能！」

俺はそう言い放つと神剣を一振りする。

「神術、第2章……光には祝福を、闇には一時の休みをもたらさん」

俺の声が終わると同時に、白銀の光が俺の周囲を駆け巡る。そして、それが無くなり残つたのは……獣玉化して眠つている兵士たちの姿だった。

『「うおつとお！……これまた一人目の勇者がやりました。一瞬で10人の兵士を行動不能にさせました！」』

しかも一回寝れば3時間は眠り続けるので、戦場復帰はまずないだろう。

合理的な倒し方だ。

「まあ、欠点は、使う「」とに靈力を消費する」とと敵味方の分別がつけられない事位だ」

(合流するか)

俺はエクレの方に合流するのであつた。

「エクレ！」

「わ、渉か。無事で何より」

分かつてはいたことだが、エクレの態度はどうとかよそよそしかつた。
まあ原因は俺の失言だが。

(なんで、あんなことを言つたんだろう?)

俺は自分の発言の理由を考えていた。

「エクレ……」

「お、勇者、無事だつたか

慌てた様子で合流してきたシンク。

「まざいよ。僕が……って言うかパラディオンが狙われている
「パラディオンって神剣だつたよな？」

僕の疑問に、シンクが頷いたことで答えた。

「そのようだな。だが作戦は変えられん。念のためパラディオンは
武器化させないようした方がいいな」

「うん。だから武器も拾つてきた」

目の前にはガレットの軍が迫つて来ていた。

「二人とも、あれは俺に任せてくれまいか?
「渉?まあいい、頼んだ」

俺の提案を聞き入れたエクレは、駆け出そうとするのを止めた。

「感謝する。では.....神術・第4章、咎人達は眠りについた」

さつき使つたのとは別の術を使う。

見かけ状変わつたのは、砲撃タイプになつた事だけだ。

ただ、これの射程範囲内と眠りにつく時間がかなり増えた。

現に、俺達が見えていた敵軍のほとんどが一気に減つた。

「さあ、行くぞ!!」

「お、おい! 先に行くな!」

先に走り出した俺に一喝しながら、エクレとシンクは駆けだした。

しばらく走つて谷間の場所をエクレとシンク、そしてリコッタと進んでいる時だつた。

スリーズ砦の方角から、花火のようなものが打ち上げられた。

それは、ある重大な意味合いがあつた。

「リコからの合図」

「本当に本陣への急襲があるとは

信じられないとばかりに呟くエクレ。

「これで確信が出来ました。レオ様は私に何か隠し事をしていきます」

今までいたリコッタは煙と共にその姿を姫君の姿へと変えた。そう、これは急襲がある可能性を考えた計画だつた。

つまり、今スリーズ砦にいるのはリコッタと言つ事だ。

そんな時、一羽の鷹が走る俺の横に降り立つた。

「……グラン砦に物騒な武器を持つて待ち構える敵陣を確認。数

は約15から30人！」

「そ、その鳥は何だ？」

鷹から伝えられた情報を伝えると、怪訝そうな表情で鷹を見ながらエクレが聞いてきた。

「ここには俺の式神。指示を出せばできる範囲内で色々とやってくれる、優秀な相棒さ」

俺は無言で式神にエクレの方に移動するように指示を出すと、それを受け入れたのか、エクレの田の前までふわりと移動した。

「この際だから触つてみればどうだ？ 大丈夫だ噛みつかないから『や、そつか……』では」

エクレはおつかなびつづ式神の頭を触る。

「触り心地が良いな」

「そうだろ？」

「へえ、僕にも触らせて」

そんな時、シンクが式神である鷹に触りつと手を伸ばす。

「あ、おいー やめ
「いい！？」

忠告するのも遅く、シンクは鷹に指をかまれた。

「式神は指示を出したこと以外はしないんだよ。無暗に手を出すと反撃されるから気を付けると言おうとしたのに
「それを早く言つてつけばー」

何とも変な雰囲気となってしまった。

「Hクレ、リコッタせこひでひで合流するんだったよな？」

「そうだが

「だったら、ここに護衛をセヨウか？」

俺の提案にHクレはしばりく考えると”ああ、頼む”と答えた。

「おい、追加指令だ。スリーズ砦から出るリコッタの護衛をしろ」

俺の指示を聞いた鷹は高く羽ばたくと砦の方へと向かった。
そして俺達も、グラン砦へと向かうのであった。

第26話 混沌と化し始める戦場

グラント砦が見え始めた時、それは突然起こった。

「ツー？」

「どうしたの？ 渉」

突然息をのんだ俺に、シンクが訪ねてきた。

「式神とのリンクが消滅……消滅時の情報から矢での奇襲を受けたらしい。護衛対象は矢が直撃したが無事のことだ」

どうやら式神では耐えられない威力だつたらしい。

そんな矢を射れるのは一人しかいない。

そして、じつちでも式神の情報通り、物騒な武器をこちらに向けてきた。

「うえええ！？ 銃！？ 大砲！？」

「勇者、この間教えた紋章術、間違いなく出せるな？」

敵の武器を見て驚くシンクに、エクレが淡々と聞いた。

「」「こないだつて、槍の奴？ 盾の奴？」

「盾だ！ 貴様が防げ！ 私と涉が切り込む！」

「あいよ、了解！」

今さりげなく俺を混ぜたよな！？

しかもシンクは前に出て行くし。

そして浴びせられるのは数多もの銃撃。

シンクは紋章術で展開した盾で、

『神術・第1章、全ての災厄は今取り除かれた』

俺は神術でそれを防いでいく。

「シンク、放たれた大砲を俺がいる上空に弾き飛ばして
「了解！」

俺は守りっぱなしは嫌なので、シンクに指示を出した。
それと同時に大砲は放たれ、俺は所定の位置に着く。

「だああありやあああ！－！」

『な、なにいい！？ 勇者シンク、追尾弾をもう一人の勇者殿に
弾き飛ばした！－』

シンクは砲撃弾をしつかりと俺のいる場所へと飛ばした。

「ホールド」

俺はそれを手でキャッチすると、爆発しないように固定させた。

「田には田を、歯には歯を－－」

そして、それを思いつきり撃つた者達がいる方へと投げ飛ばす。

『もう一人の勇者、素手で追尾弾を投げ返しました－－』

「エクレ！」

「閃空、大一文字！－」

エクレの紋章剣が炸裂した。

さらには俺が打ち返した追尾弾もある。

「ホールド、解除」

そしての次の瞬間、追尾弾は大爆発し、守っていた敵陣をほとんど倒した。

だが、俺が気がかりだったのは……

「空に雲が……」

突然空に浮かび上がった薄黒い雲だった。

どこかしらかマイナスエネルギーの値が増えてきたような気もする。

そんな状態をよそに、俺達は砦内に侵入した。

砦内にある階段を登り切り、ドアを開く。

そこはやや広い場所だった。

『全く待ちくたびれたぞ』

レオ閣下の声とともに田の前にあつた橢円形にレオ閣下の顔が映つた。

『そこにあるのはたれ耳と勇者に、渉殿じゃな。儂は今この砦の最上部、天空武道台にある。ここまでこれた褒美にわしとの一騎打ちのチャンスをくれてやう!』

映像の前まで移動した俺達は映像を見続ける。
シンクは姫君をかばっていた。

『グランベールも、エクスマキナもある。これを奪えればポイント的に貴様らの勝利で確定だろうな。無論一人ずつでは叶うまい。仲良く一人で掛かるがよからう!』

それは、完全な挑発であった。

『儂は貴様らを倒しパラティオンを奪った後、ミルヒの陣をぶちのめしに向かう!』

レオ闇下の言葉に、姫君がさらに怯えた。

『ああ、上がつてくれるがよい!』

それを最後に映像は消えた。

3人称Side

「はあ……」

「レオ様」

天空武道台では挑戦状をたたきつけたレオが一息ついていた。

その様子を、心配そうに見つめるガレットのメイド長のルージュ。

「なに、問題ない。待つておれば何も知らない勇者とたれ耳が、パラティオンを運んで来よつ。それだけでも星が変わるやもしれん」「はい……」

そう、彼女の計画では、ここにやつてくるのはシンクとエクレールの一人であると踏んでいたのだ。

そして、レオは雷が鳴り響く空を見る。

「それにしても、国をかけての大戦じゃと皿のこ、何と言つ空模様じや」

空模様を見て呟いた時、天空武道台に来る唯一の移動手段であるものが到着を告げた。

そして、そこにいる者一人がドアの方へと視線を向ける。ドアが開いた時、そこに立っていたのは……

「お邪魔致します。レオンミショリ閣下」

「ツー？」

大きな剣を持つているミルヒ姫と、その横で不敵の笑みを浮かべ、神剣を構える涉だつた。

それは、少し前に星詠みで見たものと、ほとんど同じ構成となつていることを示した。

こうして、続々と悲劇は迫つて來ていた。

Side out

覚醒まで残り、1時間26分

第26話 混沌と化し始める戦場（後編）

次回は、魔物戦まで行きたいと思います。

第27話 目覚める者（前書き）

すみません、魔物が登場するといつまでもになりました。

第27話 目覚める者

「ここからは私一人で行きます」

レオ閣下の挑戦状を聞いた姫君が、突然そう言い出した。

（自分で話し合ひう気が。だが……）

俺は嫌な予感がしてならない。

だからこそ、少しだけ意見をすることにした。

「それは承認できませんね、姫君」

「え！？」

俺の言葉に驚いた様子で見てくる姫君。

「私も」一緒に行かせていただきます」

「私一人で大丈夫なので、涉さんは」

「でしたらお聞きしますが、上に到着した際に攻撃されたらどうするのですか？ 奇襲攻撃に対応できるのですか？」

俺は性格が悪いなど思いつつ問い合わせる。

「今のレオ閣下は宝剣を奪うために躍起になっている。どのような事が起こるかは予測も出来ない。そんな状況で姫君を一人で行かせるなど、大問題だ。護衛役として一人つく必要がある」

「おい、涉！ 姫様に何ていう事を

「親衛隊長は黙つてろ！」

「ツ！？」

俺に怒鳴つてくるエクレに怒鳴り返して黙らした。

「護衛には自分が付きます。もし嫌な場合でしたら、貴方には眠つて頂きます」
「ツー？」

俺は神剣の吉宗を展開して姫君に向けて構える。
吉宗なので、切ることはできない。
よつてただの脅しだ。

「分かり……ました」

姫君は声を震わせながら了承した。

(こりや、後で謝った方がいいな)

姫君が上に向かう準備をしながら俺はそつ考えるのであった。

昇降機に乗り、武道台へと向かつ中、姫君は大剣を手に俺は神剣一本を手に無言となつていた。

「先ほどは無礼の数々、申し訳なかつた

「え？」

俺の謝罪に、姫君が驚いたような声を上げた。

「俺も衣食住を見て貰つてゐる恩もあるのでな、これくらいしなければ罰が当たる」

「そんな、もともとは私のせいで……」

「確かにそれはあれだが、いい出会いもたくさんあつた。だからこそ今俺は姫君の懐刀。姫君の身を守り、姫君の命を聞く……ただそれだけだ」

俺は自分に言い聞かせるように姫君に告げた。

そうだ、今の俺は懐刀だ。

相手が向かつてくるのであれば、手を汚しても主を守らなければいけない。

「勿論、二人の話し合いを邪魔する気はありません。到着し次第、自分は離れた場所で待機します」

「ありがとうございます」

「お礼を言われるほどの事ではないですよ」

お礼を言つてきた姫君に、俺は苦笑い交じりに答えた。

「貴方とこうしてお話ししたのは初めてですね」

「そうですね、自分も姫君とともに話すのは、これが初めてです……と、到着しましたよ

昇降機が一番右側を指示したのを見て、俺は氣を引き締めた。

そして、扉が開く。

「お邪魔いたします。レオソニミシエリ閣下」

姫君が前を見据えて声を上げると、昇降機を降りた。

俺も一歩遅れて昇降機を降り、奇襲に対応できる位置に立った。

「レオ様が国の宝剣を賭けて戦われるのであれば、私も宝剣を手にこの場に来ないといけないと思い、失礼ながら勝手に推参しました」

レオ閣下の表情は目が見開かれており、かなり動搖しているようにも見えた。

（俺と姫君の二人で来る）ことが予想外だつたのか、それとも……）

俺が思考に耽っていた時、レオ閣下のそばにいたメイドのような人が、短剣を手に姫君に向かつて行くのが見えた。

「はあ……」

間一髪のところで姫君の前に立ち神剣一本で防ぐことに成功した。

「分かりやすい奇襲だつも……」

「お叱りは後でいくらでも！ 今は説明している時間がありません！……」

神剣と相手の持つ短剣に火花が散る。

「なッ！？」 しま

「

俺は支点をずらされ、そのまま前のめりになってしまった。

倒れるのは免れたが、相手は姫君の所に向かつて行こうとした。

「 きやあー? 」

その瞬間、姫君から発せられるエネルギーによつて吹き飛ばされた。そして姫君の手にはピンク色の一回り小さな短剣が握られていた。だが、その剣からは異様なものを感じる事から宝剣であることはすぐに分かつた。

俺はすぐに奇襲を仕掛けってきたメイドの人に剣を突き付け、身動きを制限する。

その間、俺は考える。

(どうも嫌な感じがする。これは空模様のせいなのか?)

周りの雰囲気が少しずつではあるが、悪くなっているのに俺は気付いていた。

それは、姫君とレオ閣下が言ひ合ひでいるからではない。

(まさかとは思つが、プラスのエネルギーが消えかけているのか?)

それならば今の雰囲氣にも説明がつく。

(だとすれば)

「 ツー? 」

突然動悸と激しい眩暈が俺を襲つた。

まるで、体の奥底から揺さぶられたかのような気持ち悪さを感じる。しかしそれもほんの一瞬の事だった。

『グラナ浮遊砦攻略戦に参加中の皆様にお知らせします』

「ん？」

突然聞こえてきたのはそんなアナウンスだった。

『雷雲の影響か、付近のフロニーヤ力が、若干ではありますが弱まっています。また落第の危険もあることから、いつたん戦闘行動を中斷してください。繰り返します』

(フロニーヤ力が弱まっている……俺の思った通りか)

俺はアナウンスを聞きながら自分の推測があつていたことを確認した。

「あの皆さま、屋根のあるところへ」

青髪のメイドの人提案するとゆっくりと歩いて行った。

「二人とも」

俺は対峙している一人にそう告げる。

この時俺は、説明がつかないほど焦っていた。

一人はゆっくりとだがメイドの人のいる所に向かって行く。そんな時、突如としてマイナスエネルギーが増幅した。

「「「ツー？」」「

その次の瞬間、地震が発生した。

(これはまずい……)

増幅し続けるマイナスのエネルギー、総称邪氣。
その瞬間、武道台が宙に浮かび始めた。

「ミルヒ！」
「レオ様！」

名前を呼びあう一人だが、俺は空を見ていた。

（あれが、邪氣の原因か）

俺の視線の先にあったもの、それは

とてつもない邪氣と闇の力を秘めている漆黒の球体だった。

覚醒まで残り、1時間

第28話 超えられないもの（前書き）

いよいよ魔物戦です。

第28話 超えられないもの

上昇を続ける武道台。

上には紫色の球体がある。

「あれは、ここのあたりの土地神さま?」

姫君がその球体を見て声を上げるが、それはないと思った。土地神がこのような邪気に包まれているはずがないからだ。

「いや、違う」

俺の予想は当たっていたようだ、レオ闇下が否定した。
おそらくこれは……

「昔ダルキアンに聞いたであろう? おそらくは、あが昔地に封じられたである禍々しき魔物であるよ」

その次の瞬間だった。

「グオオオオ!...!..!

獣のような雄たけびが俺達を襲った。

俺達は耳をふさぐ。

その次の瞬間、いたるとこから炎柱が立ち上がる。

「ツー?」

さらに俺達の後ろの方でもそれが上がり、その衝撃で姫君が前のめ

りに倒れた。

「ミルヒー！」

レオ閣下の声を遮るように魔物は雄叫びを上げる。

その雄叫びにはどこか苦しみのようなものが感じられた。

そしてとうとう魔物の姿が露わになつた。

その姿はまるで狐を醸したたせる姿だが、魔物と言つ言葉にふさわしく、とてもない邪気が発せられていた。

さらにその周囲にはまるで魔物をするように、紫色の何かが浮かび上がる。

姫君が横にある宝剣を手にした瞬間だった。

「グオオオオオオオオオオオオオオ！」

宝剣に反応した魔物が雄たけびを上げると、地面から草の茎のようなものが現れた。

その先端は鋭い刃物となつっていた。

「はああ！－！」

「でやああああ！－！」

そして斧で茎を切り裂いた。

突然の事で硬直していた姫君の前に立ち、レオ閣下は攻撃を防ぐ。

「ミルヒ、無事か！－？」
「は、はい
ツ！－？」

ミルヒの安否を確かめるレオ閣下だが、その背後には先ほどの茎が再び姿を現していた。

「レオ様！ 危ない」

それを見た姫君は俺よりも早くレオ閣下の前に回り込むと、宝剣を横に構えて茎の攻撃を防ぐ。うつとある。

「駄目じゃー ミルヒー！」

俺は急いで姫君の前に回り込み、防ぐ。うつとする。
だが……

「「ツー？」」

半歩届かず姫君は一本の茎によって切り裂かれた。
さらに横からも茎が迫る。

「障壁ー！」

俺は急いで姫君を覆うように障壁を構築する。

そのことによつて茎の先端に貫かれなかつたが、跳ね飛ばされてその先にあつた紫色のベールに飲み込まれてしまつた。

(くわツー)

俺は不甲斐なさから心の中で舌打ちをした。

(いや、あれがあるからまだ大丈夫)

しかし俺はすぐにそう結論を出した。

姫君やそのほかの者達には”保険”を渡してある。
それがある限り問題はない。

(いじから治癒をかけるか)

俺はそう考えると姫君がつけている腕輪を経由して治癒を施す。

「貴様ああああ！」

そんな時姫君がさらわれたことに憤ったレオ閣下が黄緑色の気力を上げながら叫び声を上げた。

「れ、レオ閣下落ち付 ぐあ！？」

必至に止めよつとした俺は、突如膨れ上がった氣力に吹き飛ばされた。そのままレオ閣下は魔物に向かつて突進する。

様々な攻撃をかわして魔物に一発攻撃をするが、紫色の何かによつて下の方に叩き付けられた。

「レオ閣下！？ ツ！？」

俺は慌ててその場から離れた。

次の瞬間轟音を立て紫色の帶が俺の立っていた場所に振り落された。

もし少しでも回避が遅れていたら、俺はあれに叩き潰されていたかもしれない。

「俺に攻撃したな？ ならば、貴様の末路は決まってる……」

神剣が夥しい光に包まれる。

「轟け！！ 最終審判、レクリエム！！」

俺は必殺級の大技を魔物に放つ。

「グオオオオオオオオ！！！」

レクリエムを食らった魔物は悲鳴のよつなものを上げるが、倒れる気配がない。

「何！？ なぜ倒れない！」

俺は驚きを隠せなかつた。
最高威力を持つあれを食らつても、びくともしないのはあの短剣以
来だ。

(まさか、あいつの邪気が濃すぎるのか！?)

それ以外に思い付かなかつた。
邪気の量ではなく質が濃いために、俺のレクリエムは通用しなかつ
たのだ。

「グオオオオオオオオ！！！」

思考に耽つていたために、俺の目の前にまで茎のよつなものが迫つ
ていたのに気が付かなかつた。

「ツー？ 炎天よ、我を守る盾となれ！！」

俺は急いで盾を形成し、攻撃を防ぐ。

(よし、まだいける。質が高いのならそこまで)

俺は起死回生を狙い、神剣に靈力を込めようとした時だった。

「ツー？」

体の内側から揺さぶられるような揺きが起こった。

(こんな時に劣化かよー)

「ツー？」

俺はさつきの揺らぎで盾が消えたことに気が付いた。それに気が付いた時には、茎の先端にある刃物が目の前に迫っていた時だった。

俺はそれを躊躇が、その先には紫色の帯が振り下ろされようとしていた。

「がああー？」

俺は体を切り裂かれ、そのまま地面へと落下する。

それは先ほどのレオ闇下を彷彿とせるものであった。

薄れゆく意識の中、俺が見たのは魔物が下に降りて行く姿。

そして、地面に呑き付けられたときの背中の痛みだった。

覚醒まで残り、40分

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8133w/>

DOG DAYS～誤召喚されし者～

2011年11月24日22時59分発行